

ヒーローよりもヴィランのほうが好き

紅しげる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アンチ・ヘイトはねんのため

目次

ヒーローを嫌う少年と少女	2
少年と少女の再会	6
AFOとの出会い	10
個性の名前とヴィラン名	15
弔と出会う	19
雄英高校侵入	23
襲撃作戦	27
VSオールマイイト	31
襲撃事件後	36
番外編のクリスマス	41
買い物	45
雄英高校体育祭	50

ヒーロー殺しステイン	55
番外編のヴィランチョコ	60
恐怖のパーティー	64
新人入隊	69
雄英高校林間合宿襲撃準備	73
買い物中に緑谷と遭遇	77
真面目な人はいなかった	83
敵連合《開闢行動隊》	87
個性を組み合わせる	96
ハロウィン限定の番外編!!	99
やらかしミスター	103
目的? 知らないですね	108
名前なんてあってもなくても別に困らな	

いだろう。

112

脳無だって喋ります

121

連合の夏（投稿する時期を考えろ作者）

126

治崎登場

135

本当に悪なのかわからない連合

139

ギガントなマキア

144

明かされた事実

150

個性崩壊の薬を強奪

155

タイトル書くことなし!!

159

弔達敵連合V S マ！キ！ア！

165

すまん、もう一回言ってくれ

170

ヒーローを嫌う少年と少女

「ここは日本の何処かにある山の小屋。そこには二人の少年少女がいた

「ねえ、裕翔」

「どうしたんだ？玲奈」

虹色の髪をした少年の名前は裕翔。金色の髪をした少女の名前は玲奈。玲奈は裕翔に聞いた

「私達ってこれからどうするの？ヒーローに捕まって家に帰らされるの？」

玲奈は不安なのか裕翔に近づいた。裕翔は抱き寄せて言った。

「大丈夫。玲奈は俺が守る」

その時だった。扉が壊され、ヒーロー達が入ってきた。

「君達、大丈夫かい？」

裕翔は玲奈を後ろに隠した。

「大丈夫、俺達は君の味方だ。さあ、親御さんのところに帰るよ」

ヒーローは裕翔達に手を伸ばした。玲奈は少し怖いのか、涙目になっていた。それを見兼ねた裕翔はヒーロー達を睨んだ。

「こつちに来るな!!」

叫んだが届かず、ヒーローに捕まった。

「裕翔……裕翔!裕翔!!」

裕翔と玲奈は家族ではない為、離された。

「クソツ!!玲奈を離せ!!玲奈に触れるな!クソツ!クソツ!!離せよ!!!」

玲奈は車に乗せられそうになるが抵抗を続けていた。

「ツ!!玲奈!!」

玲奈は裕翔の声でハツとなり裕翔を見た。

「必ずツ!必ず迎えに行く!それまで待つてる!!待つてるんだ!!!」

玲奈が乗った車が走り出した。裕翔も車に乗せられ、玲奈とは真逆の方向にある家に連れて行かれた。

—————

これは少年が少女と出会う前の話

少年の両親はヒーローをしていた。殆どの人が憧れる職業だった。表ではカツコイヒーローだ。

だが、裏では違った。これは少年が4歳になった時の事だった。

「先生。この子の個性はなんですか？」

「個性は……ありません」

その一言で両親は変わった。家に帰ると家事、炊事を全てさせられた。裕翔と言う名前は呼ばれず、『無個性』もしくは『無能』と呼ばれ、少しでも忘れてたりすると物を投げられ、個性の的にもされた。幼稚園にも保育園にも通わせてもらえなかった。

「おい、無能。さつさと準備をしろ」

「無個性。お風呂沸いてないんだけど。どういう事かしら？」

「おい無能。飯も作れないのか?！」

「無個性。さつさとしてくれろ?！」

「おい無能。喋ることもできないのか?さつすが無能だな」

そんな毎日だった。だがある日、二人に緊急要請が来た。家を出たあと、裕翔は逃げ出した。近くの山に逃げた。そして、その山にあった小屋で金色の髪をした少女と出会った。

—————

気づけば家に着いていた。

「何処に行ってたの?!心配したのよ?!」

気持ちもこもつてない言葉。

「おかえりなさい」

そして、家に入った瞬間。いつもの感じに変わった。

「全く、流石無能だ。俺たちに迷惑をかけるとは」

ガシャンッ！

コップを投げられ、コップは壁にぶつかって割れた。

「おい無能。これを片付けろよ？ いいな？」

「……」

「チツ、お前には口がないのか？ オラ！ 喋ろ！」

殴られ、蹴られ、的にされた。そこで、意識が消えた。

これは、ヒーローを嫌う少年と少女の話

少年と少女の再会

あれから数日が経った。死にそうになったが裕翔はずっと耐えた、耐え続けた。時には反抗し、両親に傷を当てた。その血を舐めた。そして、そして、個性が発現した

「フーン！お前は産まれること自体が間違っていたんだ」

「それじゃあ、もう捨てまじょうか」

「いや、誰かに喋るかもしれない。ここで殺そう」

この父親の個性は『触手』だ。相手を拘束したり攻撃したりする。母親の個性は『融合』。物と物を合体させて武器にする。裕翔の個性は相手の血を取り込むと相手の個性を何度でも使える

「俺の個性で首を縛って窒息させてから山に捨てよう」

触手が首に着きどンドン締めようとして行く。

「死んで……たまるか!!」

裕翔は2本の触手を勢い良く伸ばし、両親のお腹辺りを貫いた。

「む、無個性じゃないのか……?」

「あの医者、私達に嘘を……!!!」

「もう黙れ」

裕翔は二人が死んだ事を確認して自分の血を大量に出して家を出た。裕翔は走って玲奈から聞いた家に向かった。向かっている途中で消防車を何台かが同じ方向に行っていた。裕翔は急いで向った。教えてもらっていた家が火事になっていた。

「どうかしたんですか？」

裕翔は近隣の方に話を聞いた。

「ああ、なんでもここのプロヒーローの個性が暴走して家が爆発。家族全員まだ中にいるらしい」

「バアン!!」

話を聞いていると、家が爆発し崩れていった。だが、裏の方から玲奈が出ていくのが見えた。

「玲奈ッ!」

裕翔は走って玲奈の後を追った。追って、玲奈と出会った小屋に来た。

「玲奈!!」

「ツツ!!裕翔!」

玲奈は裕翔に気づき、走った。

「会いたかったッ!!」

「ごめん、遅くなっちゃって」

二人は抱き合った。小屋に入った。だが、裕翔は倒れた。止血もせずに走ったからだ。

「裕翔!?!裕翔!?!大丈夫?!」

意識は少しだけあったが、何もできなかった。

「裕翔!?!裕翔!?!」

玲奈は手を握った瞬間。裕翔は無意識に母親の個性を使った。二人は光りに包まれた。

数秒後、光は収まった。そこには二人の子供ではなく一人の少年がいた。

「え?あれ?玲奈は…何処に?」

『…え?』

「玲奈?!何処にいるんだ?!」

裕翔は玲奈が近くにいないことに気づき、周りを見たが誰もいない。だけど玲奈の声は聞こえた。

「なんで、声だけ聞こえるんだ?まさか、アイツの個性を無意識に発動した?」

『ねえ、その個性って何?』

「あ、ああ。個性は融合だ。物と物を合体させることができる。人同士でやると2つの意思を持った体になるとか、ならないとか……」

そこで二人は気づいた。人同士でやると二重人格みたいになる事を。

「これって個性を解除したら元に戻るのか?」

裕翔は個性を解除すると体から玲奈が出てきた。

「ウツ……」

元に戻ると二人は頭を抱えた。頭の中に何かが入る感覚がした。すると、知らない記憶が出てきた。

「これって……玲奈の記憶……?」

「裕翔の記憶……?」

二人は同じ体になった事でそれぞれの記憶をわかるようになった。そして、意思疎通ができるようになった

AFOとの出会い

小屋にテレビが置いてあり、あの日の事がニュースになっていた。

「俺達、死んだ事にされてるぞ」

「私は死んだ事にされても裕翔と一緒に居れたらいいかな」

小屋には最低限の食料があつた為、過ごせている。

「玲奈、言いたいことがあるんだ」

「どうしたの？」

「俺、あの日。初めて出会った日から、お前の事が好きだったんだ」

裕翔は二人っきりの小屋で言った。

「そっか。裕翔と同じ気持ちで良かった。私も裕翔の事が好き。だから、これからは

ずっと一緒にだよ？」

「当たり前だ」

裕翔と玲奈は抱き合った。だが、その幸せの時間はすぐに消えた。

「こんな山奥に小屋があつたなんて……」

外から声が聞こえたヒーローがこの小屋を見つけたからだ。裕翔と玲奈は合体して、

身を隠した。ドアが開かれてヒーローが入ってきた。

「この布……まだ温かい！みんな、近くに誰かがいるかも知れない!! 気をつけろ!!」

入った来た最初のヒーローは個性で自身と酷似してる人形のようなものを置いて行った。

『ねえ、あの人形……』

「ああ。あの人形から鼓動、熱が感じられる。魂の無い分身を作れるのか？」

考えているとヒーローは戻ってきた。次は他のヒーローを3人連れてきた。

「俺の人形を作ってくれ。空を飛んで探す人は多いほうがいいだろ？」

一人のヒーローがそう言い、さっきのヒーローが人形を作った。それを、また他のヒーローが人形に触れた。すると、触れたヒーローは魂がなくなったかのように倒れ、人形が起き上がった。

『複製？と空を飛ぶ、そして憑依かな』

「もう一人のヒーローの個性は……」

もう一人のヒーローは家の外を眺めていた。

「しかし、本当にこの辺りに誘拐犯はいるのか？」

「おい、外を見てどうだ？お前の個性の範囲でヴィランはいるか？」

ヒーローは外にいるヒーローに聞いた。外にいたヒーローは首を横に振った。

「隠れる系の個性かも知れない。それだと俺のレーザーでは対処が難しい」

ヒーロー全員が家の外に出て、眺めていた。

『殺るの?』

「ああ。コイツらの個性が欲しいツ!!」

ヒーローはずつと外を眺めており、誰一人として動こうとしてない。裕翔はそんなヒーローの背中に向けて4本の触手を伸ばし、首を飛ばした。

「これじゃあ、もうここにはいられない」

『そうだね。あ、移動の前にこのヒーロー達の血を先に採ろうよ』

触手を死体にさして血を採った。

「これで個性は奪えたはずだ」

『それじゃあ、何処かに飛んで逃げようよ』

裕翔はマフラーを着け、フードで顔を隠して山を降りた。ビルとビルの間を進み。路

地裏に出た

(ここでもいいだろう)

裕翔が周りを見ていると一人の男が来た。

「君はこんな所で何をしているんだい?」

『ッッッ』

二人は驚いた。何故ならこの男から何千もの個性を感じるからだ。

「君、親は？」

「いない。俺が殺した」

「ほう……こんな幼い時に人殺しの経験を……」

裕翔は触手を背中から出して、聞いた。

「お前こそ誰だ!!」

「ふむ……どうだい？ここは一つ、話し合いと行こうじゃないか」

「話し合いだと？」『この人から何人も殺した感じがする』

「僕が君の先生になろう。だから、僕がやりたい事についてきてくれないか？」

『ヒーローよりかは安心できそう』

裕翔は少し考えて言った

「お前に付いていけばヒーロー達を殺せるのか？」

目の前の男は少々驚きつつも、言った。

「ああ。殺せるさ」

「……わかった。付いていく。ただ、約束しろ」

裕翔は玲奈を体から出して言った。

「コイツは俺の物だ。俺の許可無しで触れるな。それだけ約束しろ」

「ああ、良いとも。それじゃあ僕達の家に行こうか」

個性の名前とヴィラン名

男に着いていくとへんな靄があった。

「これはなんだ？」

「そうだねえ。僕達の家 of 入口とでも言えばいいかな」

男はそう答えて入って行つた。裕翔も恐る恐る入つた。

「おお！帰つたか先生！ムツ?!後ろの子供はなんだ？」

「ああ。ヒーローから逃げていた子供だよ。この年で人を殺めていてね」

「なに?!この年でか!!」

何の話をしているのかわからなかつた。

「先生、この子の名前は何じゃ？」

「僕も聞いてないね。君達の名前は？」

「ん？先生、この子以外にも連れてきたのか?!」

「見てもえればわかる」

裕翔は玲奈と分離した。

「これは……」

「名前は……前の名前はもういらぬ。俺は今日からイリスだ」

「イ、リス……? それじゃあ私はイフ!」

何故かわからないが、その名前が二人の頭に出てきた。

「それじゃあ個性名もイリスとイフにしようか」

裕翔改めイリスは自分の個性について話した。逃げるときに手に入れた個性も含めて

「ムツ?! 相手の体を作れるのか!? 中はどうなんじゃ!?!」

「子供がそこまでわかるわけ無いだろ? 取り敢えず実験がてらに誰かを連れてこようか」

先生はまた何処かに行った。

「いいか!?! もし、お前の能力がワシが思っている通りなら! “脳無” と “黒霧” を増殖させれるかも知れん!!」

2つの名前を聞いても、わからなかった。

「あんたらの事をなんて呼べばいい」

「ムツ? ワシのことはドクター、先生の事は先生でいい」

そんな感じで話していると先生が帰ってきた。ベッドに一人の子供が乗せられた。

「コイツは?」

「ああ、たまたま近くを通りかかった子供だよ。それじゃあイリス。頼んだよ」
イリスは個性で子供の人形を作った。

「ふむ。外見は同じだな」

ドクターは人形に触れた。するとドクターは驚いたのか、一瞬人形から手を退けた。
「どうしたんだい？」

「先生！この人形は生きとるぞ！」

ドクターに言われ、先生も人形に触った。

「ふむ。心臓も動いているとは……」

「イリス！こ、これは相手に触らないと人形を作れないのか!？」

「わ、わからない」

ドクターは少し考え、先生と何か話をした。

「イリスよ。記憶を遡って誰かを作れるか!？」

「やってみる」

イリスは過去に見たテレビに映っていた「オールマイト」の人形を作った。

「こ、これは！イリス！お前さんはオールマイトにあったことがあるのか!？」

「いや。テレビで見た」

それを聞き、ドクターと先生は何かを言い合っていた。

「取り敢えず、君達二人の部屋へ案内しよう」
イリスはイフの手を引いて先生の後を追った

弔と出会う

先生の後を着いていき、イリス達の部屋に案内された。

「ここが君達二人の部屋だよ」

「ね、ねえ先生」

「どうしたんだい？」

イフはイリスの後ろに隠れながら言った。

「私達に個性の使い方教えてくれるよね……？」

「当たり前だよ」

あれから数年が経った。イリス達は7歳になった。

「なあ、博士。脳無に使えるような個性のヒーローはいたか？」

イリスはヒーロー達の個性を調べながら言った。

「ふむ。ムツ？おお！この個性じゃ!!」

博士は俺にパソコンの画面を見せた。

「ええっと……イレイザーヘッド？個性は……抹消？……ほおう。個性を一時的に消す

……か」

「どうじゃ？人形はできるか？」

「ああ。これが脳無に加わればかなりの戦力にできる！」

「先生も喜ぶじやろうな」

イリスは触手の先からイレイザー・ヘッドの人形を作った。博士はその人形を解体。そして、個性が発動する目の研究にあたった。

「それじゃあ博士。あと頼んでいいか？」

「ああ。後は、ワシがやるから休んどれ。黒霧、いつものバーに連れて行ってやれ」
「はい」

イリスは黒霧を通してイフがいるバーに行つた。

「あ、おかえり！良さそうな個性はあったの？」

「抹消つて言う個性だ。それを脳無に加えるんだ」

「そつか。で、なにか飲む？」

イフに何を飲むか聞かれたイリスは

「それじゃあ、いつもので」

「いつものつて……水じゃない。黒霧、イフに水を」

「かしこまりました」

黒霧はイリスに水を入れて渡した。イリスはそれを少し飲んでから、脳無に着いて話した。

「脳無は先生と博士が作るヒーローを殺す改造人間だ」

「ですが、完成はまだなんですよね？」

「ああ、元となる体を何にするかなんだ」

そんな話をしていると先生が子供を連れて来た。

「脳無の体に彼の人形を入れようと思う」

「おかえり、先生。後ろの子供は？」

「ああ、助けを求めていた子供だよ」

「名前はなんて言うの？」

「そうだねえ、今までの名前は捨てよう。これからは……弔……死柄木弔と名乗るんだ」

子供は何も言わない。イリスはイフと先生と共に博士の下に向かい。脳無の完成を急がせた

あれから数年。イリス達は20歳、弔は19歳になった。先生はオールマイトと激しい戦いでお互いに致命傷を受けたが、博士の治療によって普通の生活ができるぐらいにまで回復した

「先生、博士。そろそろ本格的に動いたほうがいいんじゃないか？」

「そうだね。何か案があるのかい？」

「あの高校。オールマイトがいた高校。雄英高校の信頼を無くすんだ。」

「ふむ。雄英高校のプロヒーロー達の信頼を無くすのか」

「ちょうど今年からオールマイトが先生をやるらしいからついでにオールマイトの信頼も少しずつ無くせばいい」

博士と先生は少し考えた。

「僕はヴィランを集めてくるよ。博士は脳無を、イリスは弔達にこの事を伝えてくれ」

「わかった。あ、博士。俺達用の脳無の準備を頼んでいいか？」

「うむ。この脳無ならオールマイトに勝てるじやろう。だが、先に脳無と予備の脳無を選ばしてくれ」

パソコンでどの個体の脳無にするか考え、先生は捨て駒を探し始めた。イリスはイフと弔達がいるバーに向かった。

「弔、雄英にマスコミが集まった時に雄英に侵入する。手伝ってくれ」

「いいぜ」

雄英高校侵入

あれから数日がたった。ネットニュースではオールナイトが雄英高校で先生をやっている事ばかりだった。

「弔、今日マスコミが雄英高校の前にいたら。ソイツらを使って侵入するぞ」

「…わかった」

黒霧のワープで雄英高校の前の路地裏に出た。雄英高校の前が騒がしくなっていたため少しだけ覗いた。すると、マスコミが門の前で何か騒いでいた。

「弔、黒霧のワープを使って雄英高校の門を触れるか？」

「ああ、それで壊すんだな？」

弔の手を黒霧のワープで門に触らせた。すると、門が崩れた。そしてマスコミが侵入した。教師が外に出た事を確認して、黒霧に指示を出した。

「黒霧、ワープ！」

職員室に入り、色々と漁っていた。

「学校の説明書と生徒の本…？」

2冊の本を見つけた。その内の一冊を開くと、教師の写真いっぱいが貼ってあった。

「ほう。これは使える…」

「おい、カリキュラムを見つけたぞ」

「ミッションコンプリート。帰るぞ」

黒霧を使い、バーに帰った。すると、ワープの先に先生がいた

「おかえり、3人共」

「無事にカリキュラムをゲットした。あと、面白い物も入手したぞ」

先生は顔を少し笑顔にして、聞いてきた。

「それはどんなものだい？」

「学校の説明書と生徒に関しての事だ」

「その中に何か書いていたのかい？」

俺はニヤツとして言った。

「ああ、教師共の個性、弱点、歳、年齢だ。しかも学校の設備に関しても書かれている」

「それはいい物を手に入れたね。それでどうだい？良さそうな個性はあったかい？」

「ああ、あったぜ。ドクターの所で説明するよ。弔も来てくれ、つてあれ？イフは？」

「ああ、ドクターの所にいるよどの脳無にするか考えているよ」

そう言い、黒霧を使ってドクターがいる場所にワープした。そして、ドクターとイフに学校の設備と先生達の事を話した。

「ふむ、これから見て最初の襲撃は嘘の災害ルームでいいだろう。だが、行くクラスの担任がこれまた厄介じやお」

「個性を消せる個性か……私達の個性も消せるの?」

「いや、俺達のは無理だ。だが、弔と脳無の個性を消せるだろう」

対策を考えていると弔が言った。

「それじゃあお前がコイツを増やして、それを脳無に着ければいいんじゃないか?」

「それだ」

そうして、早速増やしドクターが治療し始めた。俺達はバーに戻り、チンピラ共を集めようとしていた。

「取り敢えず、ヒーローを潰したいヤツ集まれ。これでいいか?」

俺は適当にパソコンで入力して掲示板に貼ろうとした。だが、頭に少し重みを感じた。イフが頭を乗っけていた。

「これじゃあ駄目だよ。『雄英高校に恨みがある人、オールマイトを倒したい人、お金欲しい人を募集中』つと。こうでいいんじゃない?」

「いい嫁になるんじゃないか? 夫はこういうの駄目だし」

イフが俺のヤツを編集し、弔は俺の事を見ながら色々と言ってきた。

「まあまあ。私の好きな人をイジメないのお」

イフは俺の頭を撫でながら言った。なんだろう。何処も痛くないのに涙が……

襲撃作戦

現在、襲撃時間を待っていた。今は嫁のイフと合体している。

「黒霧、13号の足止め頼むぞ。できれば殺せ」

「わかりました」

そして、時間になった。最初、黒霧がチンピラ共をUSJに送りその後、に弔と脳無が入り、俺は脳無に憑依して本体は自分の部屋に置いた。

『それじゃあ行こっか♪』

(ああ!)

黒霧を通つて、USJに入った。

「オールマイト…いねえじゃん…」

「まあ、生徒を殺せば出てくるだろ。黒霧、イレイザーがこっちに来たら生徒の方に行け。13号を殺して生徒をバラバラにしろ」

「わかりました」

そして、俺が予想した通り、イレイザーが下に降りて、チンピラ共と戦い始めた。

「黒霧、行け」

黒霧は上の方に行き、イレイザーがこっちの方まで近づいてきた。

「甲、イレイザーがどれだけ脳無と戦えるか知りたいから脳無に攻撃させる」

「ああ」

俺は脳無にイレイザーを殺すように指示をした。イレイザーは何もわからないまま、脳無に殴られた。

「おい、イレイザーヘッド。オールマイトはどうした？」

俺の間にイレイザーは答えようとしなかった。

「脳無、顔を上げさせろ」

脳無は顔を掴んで無理矢理上げた。俺は触手の先を鋭い刃に変えてイレイザーの首に近づけた。

「おい、イレイザー。質問には答えろ。お前の大事な生徒を殺されなくなったらな」

だが、イレイザーは全く答えようとしなかった。

「仕方ない。脳無、コイツは俺が持つておく。他の所のガキをやって来い」

俺はイレイザーを脳無から取って、脳無を生徒の方に向かわせた。

『ねえねえ、後ろに生徒さんいるよ？』

「ん？あ、ホントだ。脳無、あそこにいるガキを一人づつ、イレイザーの目の前で殴り殺すから連れてこい」

そして、3人の子供を脳無に連れてこさせた。そのうちの二人を俺の触手で拘束して、緑髪の男子生徒だけ脳無の前に置き、イレイザーと生徒二人の顔を緑髪の男子生徒の方に無理矢理向けた。その時、黒霧が戻ってきた。

「すみません。13号の命を完全には途絶えませんでした」

「よくやった」

「よし、脳無。殺してもいいぞ」

脳無が緑髪の男子生徒を殴ろうとしたとき、紫の生徒が何か言った。

「お、お前！こんなことをして、なんとも思わねえのかよ!!」

「あ？そんなの思うに決まってるだろ？」

「じゃあなんで!!」

「いいか？俺はな、家族が無事ならこの世界なんてどうでもいいんだよ」

「狂ってる……!」

その発言に俺は笑った。

「狂ってるのはどっちだ？何故ヴィランが人を殴れば犯罪者になる？何故ヒーローが殴っても何も言われぬ？知らねえのか？これ、人権差別なんだぜ？」

『ちよつと、緑髪の子どうするの?』

「つとそうだったな。脳無、もう殺していいぞ」

「脳無が殺そうとした時、USJの入り口の扉が爆発した。」

「来たのか？」

「来たか……！」

『頑張ってねえ♪』

VSオールマイト

USJの扉が吹き飛んだ。脳無から緑髪を預かった。コイツらの個性は前日手に入れたこの個性を消す個性で止めている。

『緑髪の子とオールマイトの個性って似てる気がするの。どう思う？』

「確かにパワー系だな。だったら、個性を消せるんじゃないか？」

「できるのか？」

「ああ、この緑髪のような個性だったらな」

そう言っていると、オールマイトがこっちに飛んできた。チンピラ共はどんどん倒されていった。そして、甲を一発殴り、俺の方に来た。だが

「おっと、危ない危ない」

『ちよつと、その体は貴方だけのじゃないんだからね？』

「おいおい。その言い方はやめてくれ。精神と本体は合体してるけど、この体は憑依したのだから」

「脳無、殺れ」

その一言で脳無はオールマイトの方に飛んで行った。

「クソツッ!このっ!離せっ!!」

「悪いんだが、お前らは観戦者だ」

脳無はオールマイトと互角以上に戦った。だが、一瞬の空きをオールマイトは逃さなかった。脳無を地面に叩きつけた。そして、地面にぶつかって煙が出ていた。

「やったツッ!」

「やっぱりオールマイトは最強だぜ!!」

子供はしゃいでいた。しかし、煙が晴れると、オールマイトが血を流していた。見ると脳無の上半身が黒霧を通してオールマイトの後ろにあった。脳無はオールマイトの横腹を掴んでいた。

「よおし。よくやった黒霧、脳無。そのままオールマイトをぶつちぎろ」

そして、脳無がオールマイトを黒霧の中に入れようとした。その時だった。

「死ねえ!!」

「!?!?!」

横から子供を拘束していた触手を爆発させた。

「いっつう…!!」

『大丈夫!?!』

「ああ、だがこれでアイツの個性がわかった」

そして、脳無の体が凍らされ、オールマイトが脱出した。

「黒霧、弔。脳無にあのガキ共を殺させる。そしたらオールマイトは庇おうとするだろう。そこを叩く手伝え」

「わかった」

「わかりました」

『脳無、殺っちゃって』

脳無は緑髪に攻撃しようとした。案の定、オールマイトが緑髪を庇おうとした。

「おっと、ここから先は行かせねえぞ」

そう言って、俺はオールマイトの前に立った。

「又ウ!? 邪魔をするんじゃない!!」

そう言って、殴るが俺はそれを受け止め、触手でオールマイトの手を捕まえた。そし

て、後ろでは脳無が緑髪を殴った。

「緑谷少年ツ!! どけええツ!!」

「誰が退くかよ!!」

『ねえ、脳無の個性が消されたよ?』

イフに教えられ、俺は脳無を見た。すると、脳無のパンチが弱まっていた。

「俺を…忘れるなツ!」

「相澤君ッ!!」

『ウザいね。触手でお腹を突き破るけど、大丈夫?』

「ああ、やってくれ」

「何を…言ってるッ」「ぐっ!!」相澤君ッ!!おのれヴィランッ!!良くも!!」

イフは俺の背中から触手を伸ばしてイレイザーの腹を貫かせた。

「脳無!個性は使えるようになったはずだ。緑髪を殺せ!!」

脳無は緑髪を殺そうとした。その時だった。俺の触手に何かが当たった。

入り口の方からだ。見れば大勢のヒーローがいた。

「飯田天哉!!ただいま戻りましたあ!!」

「増援か」

『ゲームオーバーだね。帰ろっか』

「ああ、そうだな」

そして、脳無を止めて帰ろうとしたときだった。横にいた脳無が吹き飛んだ。

「は?」

見ればオールマイトがいた。

「おいおい。どんでん返してやつか?」

「貴様!良くも相澤君をッ!!」

「あ？腹を貫かれたからなんだよ」

「貴様あ!!」

そう睨まれたが、俺は触手で服の血が着いた場所を貫かせた。

『やっぱり弱点はそこだったね』

「さて、帰ろうか」

後ろを振り向いたときだった。

「デトロイト……スマッシュユツ!!!」

突然だった。後ろを振り向けば腹を押さえているオールマイトが左手で俺を殴って

いた。

「弔、先に帰ってるぞ」

『憑依解除!』

殴られた瞬間に憑依を解除した。目が覚めるとベッドでイフと向き合いながら寝て

いた。

(誰だ。この配置にしたやつは)

襲撃事件後

俺は起きてすぐに先生と博士にUSJでのことを話した。

「ほう。脳無が倒されたか、それで何処まで被害を出せたんだ？」

「オールマイトとレイザーの腹を触手で突き破ったのと、生徒を脳無で頭をかち割るぐらいまでしたかな」

『まあ、そこは明日以降のニュースを見ればわかるだろう』

「しかし、オールマイトに致命傷を与えるとは」

そんな感じで話していると、黒霧が弔を連れて帰ってきた。

「弔くん、脳無どうしたの？」

「イフか：アイツに脳無が倒された」

「は？アイツ、重傷を負ったはずだろ？」

「ああ、だがアイツは脳無を倒した。どういうことだ先生！」

『ふむ。詰めが甘かったのかな』

「深手を負つても脳無を倒すか」

オールマイトはあそこまでやったのに脳無を倒すほどの力が残っていたらしい。

「俺も詰めが甘かったな。もうちよつとアイツにやつとけばよかった」
『仕方ないさ。初めてだからね』

「博士、弱くてもいいから脳無をもつと多く作ったほうがいいかもしれない」
「ふむ。個性が勿体ないがそれはいいかもな」

『いい案だ。無個性でも体を組み合わせばちよつとした戦力になるかもね』

先生と博士は何かを話し始め、俺達はいつものバーにいた。

「オールマイト、あそこまでしたのに脳無を倒す…か」

「おい、ニュース見ろよ。もう取り上げられてるぞ」

テレビをつければUSJ襲撃事件がもう取り上げられていた。

『今回の敵襲撃事件で、生徒3名、教師3名の重傷者が出ました』

『しかも、オールマイトは敵に負けたことがわかり——』

「え、俺はあの緑髪しかやってねえはず」

「俺が脳無で殺そうとしたガキ共だろうな」

ニュースについて話していると、博士から孤児院などを襲撃して、子供を脳無の材料として誘拐する。と連絡があった。

「弔、お前の知識を借りたい」

「どうした？」

「これ壊せるか?」

「んだこれ…」

俺が弔に渡したのは金庫だ。これは雄英高校に侵入してからずっと先生に言い忘れ、開け忘れていた。

「……パスワード知らねえのかよ」

「だから頼む」

「はあ、わかった」

そう言つて弔は金庫の扉を壊した。

「で、結局中身は何なんだ?」

「知らね」

そう言つて金庫を開けた。中にはオールマイトのことだった。

「ええ〜つと、これは…あの緑髪のこと書かれてるな。ええなに、緑髪の名前は緑谷出久か」

「おい、ここに師弟関係つて書いてるぞ」

「てことは、あの子とオールマイトは弟子と師匠つてこと? No. 1ヒーローが生徒を弟子にするの?」

「いやいや、絶対に他の関係あるだろ。先生に教えところ」

金庫の中身を先生と博士に伝えた。先生達は予想していたかのような顔をしていた。先生は顔がわからないが、そんな感じがした。

「おい弔。俺らが目を覚ましたときに向き合いながら寝てたんだが、知らないか？」

「……黒霧、水」

『私はマスターですか』

「ここバーだろ」

『はあ、わかりました』

そう言つて黒霧が弔に水、俺にコーヒーを出した。

「いや待てよ。俺も水を頼んだはずだろ？」

『あちらの方から……』

そう言つて、黒霧が指さした方向を見ると、イフがいた。イフはニコニコ笑顔でこっちを見ていた。

「お前からこれやりたかつただけだろ」

『……しかし、なぜコーヒー？』

「イリスはまだコーヒーが飲み慣れてないからねえ♪」

「アハハハ!!イリス、お前つてコーヒー飲めねえのかよ!」

「甲、お前も炭酸水飲めねえだろ！それに、イフだつて俺と同じでコーヒー飲めねえだろ！！」

「うぐっ」

『貴方達は子供ですか』

「「「テメエはまず、飲み物飲めねえだろ！！／黒霧はあの飲み物飲んだことあるのか！！！」

そんな感じで大騒ぎ

番外編のクリスマス

思いつきり扉が開かれ、イフが入ってきた。

「イエーイ！今日はクリスマスマス！クリスマスパーティーだよお！」

「クリスマスパーティーですか?! いいですね！真つ赤のケーキ食べたいです！」

「二人がサンタコスになるのか? いいじゃねえか! イリスに殺されねえか?!」

「今年もこの時期がやってきたのか」

「いいじゃねえか。あと、トウワイス! テメエ、そのカメラなんだ! まさか、サンタコスのイフを撮るつもりか? 寄せよ」

「あ! 返せよ!」

そんな感じでした。

「うるせえぞ!」

「お、弔も来たか」

「俺は夜行性なんだよ! 朝から騒ぐな!」

「え、駄目なの?」

そう言っているイフを見るとクリスマスケーキらしき物を持っていた。

「……もう買ってたのか？」

「当たり前でしょ？あ、この赤いのトガちゃんね！こっちはトウワイズ！こっちのチョコケーキは茶毘のね！このカラフルのはMr.のだね！この白いの弔ね！この普通のやつは私の！」

「え、俺のケーキは？」

「イリスのは私が作ったこれね！」

「元氣よく見せてきたケーキは綺麗にハート型だった。」

「誰かに食わしたか？」

「えっとね！さっきスピナーに食べてもらったら美味しすぎて寝ちやったよ♪」

イリス（す、スピナーアアアア!!!?）

茶毘（スピナー、お前はいいやつだった）

トウワイズ（スピナーが死んだ?!このひとでなし!!）

弔（今年俺じゃなくてスピナーだったか）

Mr.（これはイフが作ったのじゃなくて良かったぜ）

「この赤いの血ですね！誰の血ですか?!」

俺らがそう思ってる間、トガは一人で自分のケーキを食べていた。

「え、じゃあこのカラフルなに？」

「ええとつと、わかんない！」

「イフ！いいか？お前のケーキを俺以外に食わせるのやめろ！」

「嫉妬してるの？わかった！」

甲（イリスナイスだ）

イリス（イフが作る料理は元々俺専用だからな）

「嫉妬するってことは……あ、あくんしてほしいの／＼／」

（あれ？女神が舞い降りた？）

赤面でイフが言ってきた、女神が舞い降りたかと思った。

「甲くん甲くん！私もみんなにあくんします！」

「勝手にやつてろ。ただ、その甘々夫婦みたいにはするな」

その甘々夫婦みたいな事とは。

「口移しがいい？スプーンがいい？どっちがいい？」

「口移しはみんながいなくて頼む」

「部屋でするのかよ」

「確かに甘々夫婦ですね」

「だろ？やるとしてもスプーンでやれ」

「はーい！」

「トガちゃん！俺にも頼む！口移しで頼むぜ!!」

「スプーン貸してくださいね？じゃないとできませんので」

その後、殆どの人がクリスマスケーキを一人で食べた。トガが無理矢理あくんとてちよつと面白い。部屋で2次パーティーが始まった。

トガとトウワイスが盗み聞きをしていて、枕の横に弔の素顔写真を置いてやった

買い物

襲撃から数週間、イフが謎の紙を持ってきた。

「これ行かない?」

「……………雄英高校体育祭?」

そう雄英高校体育祭のチラシを持ってきた。

「俺達が行けるものなのか?」

「無理だろ」

「行けるよ!それに先生から『甲とイリスを連れて行ってみるのはどうだい?』って言われたし」

「どうやら、先生に頼まれたことらしい。」

「そもそも、体育祭でできる状態なのか?」

「そこは気にしない。ほら、変装して、行こうよ!明日だし!」

「はあ……………どうする甲」

「俺が拒否しても、イフをほっとけないからお前は行くんだろ?」

「愚問だな。お前も来いよ」

「……仕方ない、行くか」

そう言うといフは子供のようにはしゃいだ。

(子供かよ)

「子供じゃないもん!!」

「なんで心の中の言葉がわかるんだよ」

「私達はもう繋がってるの。忘れたの?」

そうだった。

「おいおい、変装つつたか?」

「大丈夫!私がいい服を選んであげる!」

「今までにイフが選んだ服って……」

「全部、女物じゃなかったか……?」

「じゃあ二人が選びなよ!ほら、今から買いに行くよ!!」

これから、大量の荷物を待たされる地獄が始まるとはこのときの俺達はまだ知らなかった。

今はデパートにイフと弔と服選びをしに来ていた。だが

「ねえねえ!あれ買って!」

イフのあれ買つてこれ買つてがずーっと続いていた。

「駄目だ。今日は服選びだろ？」

「むー！ケチ！いいじゃん買つても！」

「駄目だ。上目遣いされても……………引かないぞ」

「はいはい、甘々夫婦。店についたぞ」

俺らを横目に弔が店に入つていった。

「ほら、今度買つてやるから、な？今は店に行こうぜ？」

「むー……………イリスが服選んでくれるなら許してあげる」

「わかった。俺が選んでやるよ。あ、ただ中では別の呼び方で頼む」

「はくい♪」

そう言つて、店に入った。入る前にイフが腕に抱き着いてきた。

「やつと来た…か……………お前ら、流石にイチャイチャしすぎだろ」

そう弔に言われた。弔を見ればチャラチャラした恰好になっていた。

「……………なんだお前の服装」

「店の人に頼んだ結果」

「ねえねえ！早く服を選んでよ！」

いつもよりもデレデレになったイフの服装を選ぶことになった。

「これとかいいんじゃないやねえか？可愛いお前にぴったりだろ」

「ええ、貴方が言うなら……買おうかなあ〜」

俺が選んだのはフードがついた服だ。

「可愛いしこれで決定だな。いくらだ？」

商品のタグを見ると、13500円と書いていた。

「高いな、だがこの服可愛いし買うか」

「じゃあ次は貴方の番だね！」

そう言われ、試着室に入って待っているとイフが何枚かの服を持ってきた。ただ、

「……………これ全部女物じゃないか」

「……………てへ☆」

「はあ…………」

イフが持ってきた服が全て女物だった。多かったのは水着だ。

「オイコラ、これ水着じゃねえか」

「あつ！ごめん！貴方のことだから、女の子になれると思って…………」

「いいから男物を持ってきてくれ」

「はーい！」

その後も女物を大量に持ってきた。イフが勝手に買っており、バーに帰ってから着せ

られた。意外と似合うらしい

雄英高校体育祭

昨日買った服を着て、体育祭を見に来ていた。

「マジで体育祭やるんだな」

「すげえよな」

「と言うか、やっぱり大人気だね」

入り口だけでも凄い数の人がいた。

「にしても、なんで俺はパップコーンやらを持たされてんだ？」

「彼氏が荷物を持つ、これが普通でしょ？女の子に重い荷物持たせるの？」

「いや、そんなことはしねえよ」

「はあ、またか」

弔はまた俺らの事を横目に観客席に向かった。

「あ、そうそう。席は一番後ろがいい！」

「ああ、昨日言ってたアレか」

昨日言っていたアレとは、「ちよつと面白そうなことあるんだけど」と言い、先生と俺らに相談してきた。その内容は「生徒全員の個性を一回解除する」と言うことだった。

「まあ、楽しみにしておくよ」

「ありがとう！」

そう言つて、腕に抱きついてきた。周りの視線なんか無視だ。そうして、巾の横の席に向かった。

「はい！巾の分！」

「ああ、ありがた……これ、炭酸水じゃねえか」

「あ、ごめん！こつちだったね！」

そう言つて、イフは巾にお茶を渡す。

「それで？なんで俺らのはカッブルストロー？」

「私達カッブルじゃん！」

つと、むふーとした顔でこつちを見てきた。

「はあ、しかもこれ、さつき巾に渡したやつじゃん」

「ああ、安心しろ。飲んでねえから」

そう言つていると、体育祭が始まった。

「よっっし！見るぞっし！」

「おうおう。見るのはいいんだが、なんで俺の膝の上？バックハグ待ちか？」

「聞いてくるけど、ちゃんとやってくれるの嬉しいい♪」

俺はイフにとことん甘い。それを再確認した。

「……………コーヒー飲みてえ」

「あ、見てみて！選手宣言だつて！」

立ったのは俺に攻撃してきた爆破個性だった。

『せんせえー、俺が一位取るー』

「凄いこと言うね」

「ああ、凄いな」

「それで？いつやるんだ？」

「第二種目…かな♪」

「おい、なんだそのキスを待ってそんな顔は」

確実に待っていた。何なら唇を近づけてきた。

チュッ

一回だけしてモニターを見た。恥ずかしいからだ。

「ん？おい、第一種目が始まるみたいだぞ」

そう言つて、気を紛らわせた。だが、イフは俺にべったり引つ付いてきて、離れない。

「はあ、コイツらのせいで集中できねえ。おい見ろよあの緑髪頑張ってるぞ」

「ほお？あんなに重傷だったのに、敵が怖くないのか」

緑髪は頑張つて走っていた。見れば、少しだけ顔が崩れていた。やはり、あの時の傷だろう

「あ、見て！イレイザーはあつちにいるみたいだよ！重傷だつてテレビで言つてたのに……凄いな！」

そんな感じで、殆どイチャ付いて体育祭を見なかつたり、弔に帰つてからやれと言われたりしていると、第一種目が終わった。第2種目が始まると、イフは前に向いた。少しだけ寂しかった。

「そろそろだね！」

そう言つて、タイミングを待った。すると、爆破野郎が個性で飛んだ。

（今だ！）

（おけ！成功したら、デーパーキス頂戴）

（わかつたからはよ！）

そう言うのと、爆破野郎の個性が消え、地面についた。

『爆豪勝己 アウト！』

爆破野郎は3種目目に行く前に終わった。

「そんじゃ、ズラかるぞ！」

そうして、黒霧を使って帰った。その後、デーパーキスをせがまれたあと……まあ、

ご想像におまかせします

ヒーロー殺しステイン

体育祭を邪魔した結果、イレイザーが犯人扱いを受けたらしい。そのことを先生に報告すると少し褒めてくれた。先生への報告顔終わったら黒霧に会わせたいヴィランがいると言われた

「黒霧、会わせたいヴィランって誰だ？」

「ヒーロー殺し、ステインです」

そう言われた。まさか黒霧がステインとコンタクトを取っていたとは。

「そうか。ステインを手中に収めるってことか？」

「そういうことです」

「いいな、連れてこい」

「わかりました」

そう言つて、黒霧が消えた。その数分後に黒霧が帰ってきた。

「お前が「待て弔、ここは俺にやらせろ」

そう言つて俺は手を出した。

「はじめまして、ステイン。俺達の仲間にならないか？」

そう言ったが、ステインは無視。

「……子供の遊びに付き合ってられない」

そう言い、ナイフで弔の顔につけてる手とイフの顔を傷つけた。

は？

「おい、お前……何してやがる」

「フン、お前らがまだガキだつて事だ。お前らと手を組むきはない。黒霧、俺を元の場所に戻せ」

そうやって黒霧はステインを元の場所に戻した。俺はすぐにイフのそばに駆け寄った

「イフ！大丈夫か?！」

「うん、大丈夫だよ。ほら傷ももう治ったから」

そう言い、甲を見た。

「甲、俺はアイツを許さねえ」

「……ああ、俺も同じだ。アイツを仲間にするのはもうなしだ。後悔させてやる」

「殺してもいいか?」

「ああ、いいぞ」

そうして、先生にも報告した。

「先生、悪いんだがステインを仲間にするのは無しになった」

『何があったんだい?』

「甲の顔の手を傷つけるだけじゃなく、イフの顔に傷をつけやがった」

『ほう……それは仕方ない。彼を仲間にするのは諦めよう。それで、復讐するのかい?』

「ああ、イフの顔に傷つけた代償は大きぜ……ステイン」

『試作段階の脳無、百体を君に渡そう。それと、君が使用していた脳無を少し改良した。』

『それで存分に暴れたまえ』

「ああ、助かる」

そうして、先生との通信を切った。

「甲、脳無を大量に貰ったぞ。黒霧、ステインは何処にいた？」

「保須市です」

「ねえ、そう言えば雄英高校の体育祭が終わって、次は職業体験みたいなのがあったわけ？」

「マジか。ナイス報告だ」

聞けば、もうすぐ職業体験があるらしい。

「その時に脳無を解き放ち、ヒーローを殺し、生徒を殺して、ステインを殺す」

「ステインは俺に殺させてくれ。イフの顔を傷つけた罪は何よりも重い」

「……………わかった」

「形が残らないぐらいグチャグチャにしてやる」

この日、俺は博士に頼み、脳無に変身する個性とステインの個性を入れた

番外編のヴィランチョコ

みんながソファアーやら何やらに座ってスマホを触っていると、イフとトガがドアを開けて入ってきた。

「みんな！今日はバレンタインデーだよ！チョコだよお！」

「…………その両手の袋は全部チョコか？」

「そうです！イフさんと一緒に選びました！」

「はあ…イフが作ったチョコはないんだな？」

「ないよ？だって、去年作ったチョコは何故か周りの物を吸い込み始めたもん」

（ああ……あれか）

（（（ブラックホール?!）））

何故かイフはダークマターを作れる。トガは復路から真つ赤になっている箱から、真つ赤に血で染まっているチョコを取り出した。

「……待って待て、それ誰の血？」

「スズメさんの血です！」

「スズメの血を飲むな！」

トガがスズメの血のチョコを食べている間、イフがみんなにチョコを配っていた。
「ん？このチョコ星型だ」

「俺のチョコは手だ…」

「手?!」

弔へのチョコが手形だった。ホントどこで買ったのだろうか。

「イテツ！」

チョコを食べたミスターが口を抑えていた。

「どうした?!」

「これが入っていたんだ」

ミスターが口の中から何かを出した。

「これは……ビー玉?」

ビー玉が入っていた。しかも中に何かが入っていた。

「あ、これ俺が隠していた本じゃねえか!ベッドの下に置いてた本が入ったヤツ!」

「お前、バカじゃねえの?!ベッドの下はイフが毎晩確認するからって!」

「へえ……イリス…その話、後で詳しく聞かせて?」

「あ……」

俺達はやってしまった。

「はあ……………あ、これ巾と茶毘とイリスのね！」

「「え？」」

イフが袋とは違う場所から真っ黒いハート型の何かを取り出した。

「ほら、これ私の手作りチョコね」

俺らの目の前にイフの触手があり、ダークマターを持っていた。

「ほら、三人共……………口開けて？あ〜ん♡」

「「うぐつ……………」」

「うふふ……………口を閉じて……………もしかしてあ〜んだけじゃなくて、口も開けてほしいの？
も〜！しようがないなあ〜♡」

（（あ、俺ら死んだ…………））

イフの触手に無理矢理口を開けさせられ、真黒い物体を食わされた。

パサパサしているような、ネチヨネチヨしているような、甘いような辛いような、苦
いような、渋いような色々な味がした。

「あ、そう言えば俺は食っても大丈夫なんだった」

「そうだね！だったら、もつともーつと食べて？いーっぱい余ってるからね♡」

「あ……………ハイ」

「スピナー達は何も隠してないよね！」

「ああ！ナイフがちよつと散らかってたかもしれないけど……」

その後、スピナーのベッドの下から薄い本が発見され、スピナーも同じチョコを食わ
されていた

恐怖のパーティー

俺は夜の街の一つのビルの屋上にいた。触手を靡かせながら、夜の街を見下ろしていた。もちろんイフは俺の中にいる。隣には弔と黒霧がいる。

『そろそろ8時だよ〜！』

「わかった…弔、そろそろ時間だ」

「ああ、パーティーを始めようか」

弔がそう言うのと、上空のあちこちに黒霧のワープゲートが開かれ、一匹づつ脳無が投下された。投下されて数十秒後、爆発音と黒煙と共に人々の悲鳴が聞こえ始めた。

「ここだとよく悲鳴が聞こえるな」

「ああ、だが…：…本当の恐怖はこれからだ…!!」

『じゃ、行こつか♪ヒーロー殺し殺しを!』

「ああ…弔、ステインを見つけた。ガキと戦ってる。かなりステインのほうを押されているな」

「へえ…ステインが負けてるわけ?」

「んじゃ、行ってくるわ」

俺は脳無に憑依ではなく変身して、ステインがいる場所まで行った。壁を壊しながらステインに殴りかかった。

「!!!?」

「があ!?!」

よそ見をしていたステインの顔を掴み上げ、壁に叩きつけた。

「お、おい!」

「あ?」

『あ、見て! イリス、あのとときの緑髪の生徒だよ!』

「ん?……ああ、お前はあのととき脳無に何度も殴られたガキか……生きてるっていうのは体育祭で知っていたが……あ、わかるか? イレイザーとオール偽マイト善の腹を触手で貫いたの俺らだぜ?」

「お、お前! あのとときの……!!」

俺らが何なのかわかった緑髪の顔が真青になっていた。そして緑髪が俺のことを殴ろうとしてきた。顔を見れば恐怖と絶望で本能的に殴りかかってきていた。その拳には殺意も何も感じない。俺は緑髪の拳を掴んで止めた。

「おい! 緑谷を離せ!」

どうやら緑髪は緑谷らしい。紅白髪の男が俺に向かって氷の氷の個性で攻撃してき

た。俺はその氷をわざと受けた。

『ねえ、前に生徒に関しての本あったよね？それ読んでおいたほうがいいんじゃないの？』

イフに言われてそんなものがあつたことを思い出した。思い出しながら、氷を割って脱出した。そして後ろで待っていたステインがナタを構えていた。

「へえ…ヒーロー殺しがヒーローと共闘か？だがな、甘すぎる」

着地と同時に右足を地面につけると同時に、ステインに向かって地面かた氷の杭を出した。

「俺と同じ個性?!」

「は、離せえ!!」

緑谷が顔を殴ってきた。だが、あまりにも弱すぎて俺には効かなかつた。

「き、効いてない?!」

俺は緑谷を壁に投げつけるのと同時に緑谷とオールマイトの個性を発動させて投げた。緑谷が壁にあつた瞬間、ビルが崩れた。

「お前！良くも緑谷くんを!!」

鎧のようなガキが俺に向かって回し蹴りをしてきた。足を見れば車とかのマフラーのような物が付いていた。それが個性のようだ。

「お前も死にてえみてえだな」

「なっ?!」

「飯田!!」

このエンジンのガキは飯田というらしい。俺は飯田の足を掴んだ。それと同時に飯田、緑谷、オールマイトの個性を発動させて、振り回して勢いをつけて地面に叩き付けた。叩き付けたあと、飯田を踏み付けて、踏み躪った。

『ねえねえ、紅白くんはどうするの?』

「っと、そうだな」

イフが背中から触手を出して、ステインから俺を守ってくれた。イフはその後ステインの首に触手を巻き付けて何度も地面に叩き付けた。

「クソツ!!」

紅白が左手から炎を出した。どうやら炎と氷を出す個性のようだ。

イフが動かなくなつたステインに数回か触手で体を貫かせた。

『さー私の顔に傷をつけた罰はできたよー帰る?』

「いや、このガキをやつてから帰ろうか」

俺はスピード系の個性を発動させて紅白に一瞬で近づいて顔を掴み上げ、地面に叩き付けた。少し血がついたが、俺らは気にしない。

「んじゃ、帰るか」

『はい！それじゃあワープさせるね！弔達も一緒にワープさせるよー！脳無は使い捨てでいいって博士が言ってたから、このまま放置するねー！』

そして俺達は帰った。俺とイフは帰ってから雄英の生徒と教師全員の人形を作り、個性を取り込んだ。博士にはちゃんと許可を貰っている。

そして後日のニュースでステインは重傷だったが、生きているらしい。緑谷達もかなりの重傷らしいが、生きているようだ。捨て駒の脳無達は全員ヒーローに倒されたらしい。

新人入隊

ステインが捕まってから数日が経とうとしていた。俺とイフは現在、弔とは別行動をしており、先生とドクターのところにいた。

「なに?! 雄英高校の生徒を拐うだど? いい考えだが、どの生徒だ?」

『爆豪勝己…個性は《爆破》だね。これがどうかしたのかい?』

「ああ、俺の考えが正しかったら、この個性は成長すれば触れたりせずとも物を爆破できるかもしれないんだ。これを脳無達が持てば…」

「ヒーローと自爆でき、脳無は再生で元通り…死なない爆弾だな…」

『いい考えだ。彼を脳無として迎え入れよう。だが、その前にイリス、イフ、その個性を使つてどうだ?』

「ああ、今では物に触れずとも爆破はできる」

『でも、威力がショボくて…まだ慣れないかな』

そして一匹の脳無に個性《爆破》を移し、試しに、サンドバッグに攻撃させた。すると、脳無が触れた状態で爆破させるとサンドバッグを破壊できた。だが、その横にあったサンドバッグに今度は《見るだけ》での爆破を試した。すると、少し焦げる程度で完

全な破壊は無理だった。

「なるほどのお…まだまだというわけじやな」

『いい個性だ…爆豪勝己をただ脳無にするのは惜しい…そうだ、連合に入れてみてはどうだね?』

『それも考えたんだけど《スパイ》によれば、爆豪は腐つてもヒーロー志望、敵を殺すほどの爆破は持つてないんだって』

「だから、連合に入れるのは多分断るだろう。まあ、試して見るけどさ」

「そうか…では、この脳無の爆破を少し実験に使ってみる。二人は帰りなさい」

そして迎えに来た黒霧の中へと入っていった。バーに戻ると、知らない男女が弔と戦おうとしていた。

「弔、コイツらなんだ?」

「…クソガキとクソガキだ」

「なるほど、新人か」

「よつと、そこはちゃんと言わないと駄目だよ」

女のほうはイフや俺を見て目をキラキラさせていた。男の方は火傷したのか、体が色々と大変なことになっていた。

「自己紹介しろ」

「はい！トガです、トガヒミコです！ステ様になりたいです。ステ様を殺したい。ステ様を殺したい！！だから入れてくよ！弔くん、敵連合！！」

「採用」

「おい！」

「次、火傷マン」

「…茶毘だ」

「採用」

「おい！勝手に入れるな！」

「なに言ってるんだ弔。コイツの個性、血を舐めたたソイツになれる…的な個性だ。それを脳無に入れてみる？一般人に紛れ込んで、ヒーローを殺せるぞ？」

そう言うのと、弔はその手があったとかそんな感じの顔をしていた。

「トガちゃんって言うんだね！男ばっかりで女の子増えて嬉しいな〜」

「ハワワワ！」

イフとトガは早速仲良くなったようだ。

「茶毘、お前の個性は炎を出せる…って感じでいいよな？」

「ああ」

「つと、そうだった。トガちゃん、茶毘、少し血をちょうだいね」

「血ですか？いいですね！私、血が大好きです！」

「…別に血ぐらいなら分けてやる」

「んじゃ、二人とも腕を出してくれ」

二人が腕を出して、俺がその腕に触手の先端を軽く刺す。そして血を入手し、二人の個性もコピーできた。

「イフ、トガと一緒に遊んでくれ。黒霧！今すぐ先生のところに連れて行け!!」

そしてドクターにトガのコピーした個性を脳無に付与させ、そこから辺の一般人の血を飲ませた。すると、脳無がその一般人へと姿形を変えた。

『ドクター、これ増やせるかい？』

「ああ、これは革命的じゃ!!」

そして、実験として、一つの一般家庭の住民を全員誘拐し、その子らの血を飲ませ、一般社会に脳無を紛れ込ませた。それから数週間、その一般人は脳無とバレることなく、血の補給もなしにできることに成功した。これにドクターは大喜びだった。そして、《市民脳無計画》として各都道府県のヒーローではない適当な二つの家庭を全員脳無に変え、潜り込ませられた。

雄英高校林間合宿襲撃準備

トガ達が入ってから数日が経過した。今日も先生から連絡が来ないため、いつものバーでみんなと一緒に飲み物を飲みながら遊んでいた。

「ぬわあー！負けたー！」

「はいクソゲー」

「弔、いつつもクソゲーって言うよな…」

丸い机を囲うように座り、机の上にはトランプカードが撒かれていた。ババ抜きだ。最後までジョーカーを持っていた弔はイライラしながら席を外した。

「てことで、今日の食器洗い担当は弔な」

「全食器を粉々にすればいいんだな」

「駄目だよ?!」

「ちやんと洗えー」

「血は見せて欲しいです！」

「死柄木弔、食器を壊せば貴方の貯金からお金が引かれますよ」

黒霧がそう言うのと、弔は舌打ちをしていたが、食器洗いを始めた。

「えつとね……あ、いた！」

イフが指を刺した方を見ると、緑色の何かが路地裏を走っていた。俺達はその緑色の前に瞬時に移動した。

「な、なんだお前！」

よく見るとトカゲのような姿でどことなく、ステインに似ていた。そして俺は黒霧のワープ能力を使い、トカゲをバーに連れてきた。弔達に説明を任せ、俺は新しい人材を探しに向かった。ビルの上を飛んで移動し、ヴィランを探した。

すると、ある街のビルが爆発した。何が起こったのか見に行くと、筋肉ダルマのヴィランが暴れていた。

「血い、見せろお!!」

そう言い、ヒーローをその巨大な腕で叩きつけていた。ヒーローからは叩かれる度血が飛び出していた。

「おいおい、こんなので終わるなよ!!もっと、もっと血を見せてくれよおお!!」

これ以上暴れさせると、ヒーローが来ると思った俺達は俺の触手でヴィランを拘束した。

「な、なんだこらあ?!」

俺達はフードを被り、ヴィランの前に立った。

「おい、お前、その個性…いや、もっと血を見たくないか？」

「血か？血をか?!見せろ、見せてくれよお?!」

「なら、俺と一緒に来い。自由に拳を振るい、血が見れる場所へ連れて行ってやる」

「大丈夫。君と一緒に血を見たいって言ってる子もいるから、貴方だけじゃないから安心して」

「そうか、そうか！血が見れるか！ついていく、ついていくぞ!!」

そして俺は黒霧を通って、まずドクターの場所へと行った。ドクターに潰れた片目について、相談をして、目のかわりになるものをくれるとのことだった。

買い物中に緑谷と遭遇

雄英高校の林間学校を襲うために集めた敵達の分の色々を買いにシヨッピングモールにやってきた。

「すごいーい！」

「シヨッピングですね！」

「チツ…なぜ俺が此処に来ないと…」

弔は引きこもろうとしていたので、俺が無理矢理引つ張ってきた。

「んじゃ、さっさと買うものだけ買って帰るぞ」

「はーい！」

「…幼稚園かな？尊い」

弔の頭を叩き、俺達は普通にシヨッピングを始めた。イフとトガが各々の服を試着し、それぞれ感想を言い合っていた。

「……あ？」

「ん？」

弔が突然下の階を見下ろしていた。弔の視線を追って、その先を見ると、雄英高校の

A組が買い物をしに来ていた。弔はそのうちの一人を見ていた。

「……問題は起こすなよ？」

「さあ、どうだろうな」

「やったらお前の部屋にGホイホイを置く」

「は？」

「安心しろ、めちやくちや強力な奴だ」

「お前マジでやめろ」

「冗談だ」

そう言う弔が1階へと降りていった。そこへちようど買い物を済ませたトガとイフがこつちへとやってきた。

「あれ？弔くんは？」

「ん？ああ、アイツなら下に行った」

「そっか、何かのお店があるのかもね」

そう言い、イフが俺に買った服などが入っている袋全てを俺に渡してきた。

「あ、見てください。ステ様のグッズです！弔くん、あれを買いに行ったのかも！」

トガがそう言った。俺も少し身を乗り出して、下を見た。確かにステインのグッズが売っており、それを見て色々言っている客が数人、その近くのベンチで右手を緑谷の肩

に回し、首に指の4本をつけている弔と緑谷が座っていた。

「トガはあのグッズが欲しいか？」

「欲しいです！」

「じゃあ買いに行こう！」

そう言い、イフが俺とトガの手を引つ張つて下の階へと降りていった。エスカレーターでゆつくりと降りていき、俺は弔の行動を見ていた。

「……………つて、ステインのマスクだけじゃなくてナイフも売ってるのかよ……」

俺は少し呆れた声で言った。理由は数多のヒーローを復帰不可能にしてきた敵のグッズを売っているのだから、ヒーローの家族などからは不評だろう。

「見てください！ステ様が首に巻いてるのと一緒です！」

「私も同じ物〜」

そう言い、商品を首に巻くイフ。あまりの可愛さに即購入した俺であった。普通に売ってそんな物なので、誰も何も言わない。そして二人が近くのお店でアイスを買に行つた。俺はフードを被り、弔のところに向かった。

「よ、何やってんだ？」

見れば弔が首を掴んでいるためか、少し生きが荒くなっていた。

「……アイツらは？」

「アイス買いに行った…つと、緑谷……だったっけ？わかるか？ステインの時も出会ったよな？」

「え?!……USJの時も、ヒーロー殺しの時も、姿が違う…」

「で、なんの話をしているんだ？」

弔曰く、ステインについてだった。ステインと俺達、何が違うかという話だったらしい。その話に少し興味が湧いたため、緑谷の右側に腰を降ろした。

「そりゃ俺も気になるな……俺はイリス、よろしくな緑谷。さ、お前は何が違うと思う？」

「……敵連合お前達のこととは理解できないし、納得も出来ない……だけど、ヒーローステイン殺しは納得出来ないけど、理解はした……」

緑谷の目が俺と弔を交互に見た。

「僕も、ヒーロー殺しも……始まりはオールマイト…つてこと……やり方違っても、理想に生きようとしていたこと……だと思おう」

そう言うと、弔が低い声で言った。

「そうか……なんでヒーロー殺しがムカつくか……なんでお前が鬱陶しいか……わかった気がする…」

「え……？」

俺も少しわかった。コイツもステインも全てオールマイトだと言うことだ。

「全部……オールマイトなんだ」

アイス屋を見ていると、イフ達が俺達の分のアイスを買って出てこようとしていた。俺はそれに近づき、自分の分のアイスを受け取った。

「あ、お前らフード被ってる」

「え？はい！」

「了解です！」

そして弔のところに戻ると、弔が緑谷の首を締める強さを少しずつ上げていた。「救えなかった人間などいなかッ?!」

俺は触手で弔に手刀して気絶させた。解放された緑谷は咳き込んだ。そこへクラスメイトらしき人物がやってきた。

「デクくん……なにしましたんですか……」

クラスメイトを見て緑谷は少し焦っていた。

「な、なんでも「おっと、もうこんな時間だ」?!」

俺は弔を担いでその場を去ろうとした。すると、緑谷が俺を睨みつけてきた。

「ま、待て……イリス！」

「ん？どうした？」

「敵連合は……オール・フォー・ワンは何が目的なんだ……」

「え、敵連合って……!!」

俺は何も返さずに弔に肩を貸して、イフとトガと一緒に帰った。その後、シヨツピングモールが警察に捜査された。俺達は人気のない場所へ行き、黒霧でバーへと還ったため、目撃情報は一切なしと言うことになったそうさ。

真面目な人はいなかった

『オール・フォー・ワンは何が目的なんだ』

緑谷が言ったこと、先生を知っているということとはオールマイトと何らかの関係がある。そう思った俺は先生にその話をした。

「多分、アイツはオールマイトと何らかの関係を持つてる」

『ほお…継承者か…なら、残り火も小さいだろうね…』

「ヤツの個性は奪うのか？」

『最終的にはね、その話はまた今度にしよう。さ、バーに戻りなさい』

そう言われて黒霧の迎えが来て、バーへと向かった。バーでは新入りが何人かいた。一人はマジシャンのような格好をした人物、一人はスーツを着た男、一人はサングラスをかけた男だ。

「おい巾。敵連合（かきごう）はいつから変人の集まりに変わった」

「トガが着た時からだ…おい、お前から自己紹介しろ」

「自己紹介ついでに血分ける」

スーツを着た男はトウワイズ、マジシャンはミスター、サングラスはマグネ、通称マ

グ姉。この中ではミスターとマグ姉の個性が強いだろう。そして弔や茶毘、マスクュラーの血も貰い、敵連合全員の個性をコピーできた。

「なあ、トウワイスの個性で増やした人物は個性使えるのか？」

「ああ！使えるぜ！使えねえよ！」

「そうか…」

なら、俺の体の中にある個性だけを増やせたりしねえかな…それと、色々な物を繋げれば――

「おい、イリス。襲撃するメンバーだが、俺以外の全員でいいか？」

「黒霧は抜けよ？あ、脳無は入れろよ？俺の脳無じゃなくて、博士が作った脳無」

「わあーつてるよ」

と言っている弔だが、現在野菜を残してフォークを俺に向けていた。そう、食事中なわけだ。

「それでお前らは何をやってるんだ？」

弔と違い、バーカウンターの座ってワイングラス片手に殆どの奴らが何かをしている。見れば黒霧がマスターをして、トガ達が客として飲み物を頼んでいた。そして黒霧のワープゲートで無理矢理マスター側に連れて来られた。

「(トガ)は頼みました」

た。そう言い、奥へと消えていった黒霧。俺は溜息を吐きながら茶毘達の方へ振り返った。

「……………注文は？」

「「水」」

「帰れ」

コイツらはバーって何か知ってるのか？自動販売機行けよ。え、もしかして買って来いってこと？

俺はグラスに水道水を入れて茶毘達に渡した。

「で、他の奴らは？」

すると、弔が野菜を食べるのを諦め、茶毘の隣に座った。ジト目で弔を見ると、メニュー表片手にルービックキューブを持っていた。

「あ、すいません。この「敵連合の人は十料金の百万な」…ガキが」

「お前より上だよ」

すると、イフが真剣な顔をしてメニュー表を開いた。その横のトガは血のように赤いワインを見ていた。そして、メニュー表を置いて、手を顎に置き、真剣な目で俺を見てきた。弔達と違う、真面目な物を頼んでくれるだろう。

「注文は「イリスお持ち帰り」……………」

イフなら真面目な物を作ると思っていた俺が馬鹿だった。

バーで遊んだあと、俺はイフと合体して、先生達に内緒であることをしていた。

『大丈夫なの？』

「ああ、問題ない。これが完成したら先生や弔が幸せになる世界に近づける……」

そして俺達の中で何かが融合を始めようとしていた。それと同時に俺の目の前でマ
グ姉の個性とマスクュラーの個性が融合しようとしていた。

敵連合 《開闢行動隊》

あれから数日、俺達は黒霧を通って雄英生の合宿先近くへと向かった。

「で、どうするわけ？」

茶毘が俺達に聞いてくる。俺の中からイフが茶毘の質問に応えた。

『まず、スピナーとマグ姉、マスキュラー以外のみんなはバラバラに動いて、スピナーマグ姉、マスキュラーはヒーローをお願い。トガちゃんは何人でもいいから、血の回収。私達も血は回収するからね。トウワイスは茶毘を増やして、増えた茶毘を施設に侵入させる。ミスターは目標、バクゴートラグドールの回収ね。他のみんなは好きに暴れちやつていいよ！』

そう言い、全員が各々の持ち場に着こうとした。

「あ、待てマスキュラー」

「あ？なんだ？」

「この場所に沢山の花を咲かせろ。血でできた真つ赤な花をな」

「どれだけやってもいいってことか！サンキューナ!!」

そう言い、マスキュラーはスピナー達を追いかけて行った。俺達の持ち場は一人でい

るヤツを狙うことだ。

『ねえ、良かったの？ 《超再生》をマスキュラーに渡して』

「ああ、アイツは俺、弔、茶毘に続く副戦力だ。アイツを奪われたら結構めんどくさい。アイツの個性はコピーしてあるから、複製して脳無につける。すると、戦力が大幅に上がるってわけだ。もう複製はできてて、今回連れてきた脳無の一匹につけてある」

『そっかー。やたね！』

「まあ、弔のことだ。茶毘、トガ、スピナー、マスキュラー、ミスタ以外は殆ど捨て駒だろうな」

すると、山の一部が青い炎に包まれ、青い炎はどんどん燃え広がっていく。そして、ピンク色の霧のような物が出ている場所が見える。始まったようだ。

「さ、俺達も行くでしょう」

俺は飛び降り、地面に着地と同時にスピードを上げて、走り出した。

く三人称く

敵連合《開闢行動隊》の奇襲は成功し、ピクシーボブを気絶させ、麗日お茶子、蛙吹梅雨の血の採取に成功した。

マグネがピクシーボブを引き寄せ、頭を打ち付けて気絶させた。それを追ってやって

きた緑谷達にスピナーは言った。

「ご機嫌うるわしゆう雄英高校!!我らは敵連合《開闢行動隊》!!!」

「ねえ、この子の頭潰しちやおうかしら、どう思う?」

「さっさと潰せよマグネ!なんなら俺が潰してやろうか?!」

そう言い、ピクシーボブの頭を潰そうかどうか迷っているマグネとマスクュラーを見て、虎は激怒した。だが、スピナーがそこに割って入った。

「生殺与奪は全て、ステインの仰る主張に沿うか否かだ…」

「つまりあれだな、ステインの主張に沿わない奴らは全て殺しておけってことよ」

「そういうことか!スピナー、誰をやればいい?さっさと血を浴びさせてくれえ!」

マスクュラーを見た瞬間、マンダレイの顔が変わった。

「マスクュラー…!!!」

「あ?」

どうやら、マンダレイはマスクュラーに攻撃を仕掛けようとした。それは感情に任せられた行動で、虎の静止を無視した。その結果、マグネの《個性》でピクシーボブのように引き寄せられた。

「そう何度も同じ手は食わん!!」

虎がマグネを突き飛ばし、個性を止めた。すると、マンダレイが地面に落ちた。

「マスクュラー、この二人はやっていい！利己的なヒーローモドキは粛清対象だ!!」
「お、マジ？んじや——」

遊ぼうじゃねえか

マスクュラー達がマンダレイ達と交戦を開始すると同時に、トウワイスによって増えた茶毘は施設内に侵入しようとしていた。

「おいおい、心配が先に立ったか？イレイザーヘッド」

「なっ?!」

茶毘の炎がイレイザーヘッドを包み込み、見えなくなる。

「邪魔はよしてくれよプロヒーロー。用があるのはお前らじゃない……まあ、プロだからこれぐらい避けられるよな」

施設の入口上の屋根に炎に包まれたと思っていたイレイザーがいた。どうやら、炎に包まれる前に避けたらしい。そして、茶毘はもう一度炎を出そうと右手を前に出した。

「出ねえよ」

イレイザーが言うように、炎が出なかった。イレイザーの個性で消されていからだ。そして膝蹴りをされ、顔を地面に押し付けられる。

「目的、人数、配置を言え！」

「あ？なんでだよ」

すると、イレイザーが茶毘の左手を折られた。

「焦ってんのか？イレイザーヘッド」

答えなかったからか、右手も折られた。イレイザーは気づいていないが、茶毘の体が少しずつ、柔らかくなっていた。そして、飯田達がやってきたのを見て、茶毘はイレイザーの拘束から抜け出す。

「そんなに生徒が大事か？」

イレイザーが布でもう一度茶毘を捕まえようとした。だが、茶毘の体が土のように崩

れ落ちた。

「また会おうぜ」

そう言い、茶毘が消えた。

時を同じく、森の中で茶毘が木を燃やし、その近くでトウワイスがいる。

「ああ、駄目だ！茶毘、お前やられた！弱!?!ザコかよ!!」

「早いな。弱いな、俺」

「バカ言え!!結論を急ぐな!!お前は強い!プロが強すぎただけだ!」

「…トウワイス、もう一度俺を増やせ。プロの足止めは必要だからな。ゾンビ戦法ってやつだ」

「ザコが何度もやっても同じだろ!任せろ!!」

そう言い、トウワイスは茶毘を増やした。

くイリスく

俺達は壁に埋まっている脳無の前に来た。目の前には緑谷がいる。

「あく…俺の自信作が負けちゃってるよ…」

『やっぱり先生達のようにはいかないね!』

「だな…つと、よお緑谷。また会おうとは思わなかったぜ!」

「お前は…あの時の!!」

俺は黒霧の個性を使って脳無を回収した。コイツはまだ動いているため、まだ改良できる。

「さて……って、お前めっちゃボロボロじゃねえか…んじやコイツは結構いい線まで行つてたつてことか…」

「な、なにが目的なんだ…!!」

「あ、それな。俺達の目的…いや、俺の目的はアイツ…えつと…名前なんだっけ…」

『ラグドール!』

「そう、ラグドール! アイツなんだよ。どこにいるか教えてくれるか?」

「ラグドール?!」

いや、全然バクゴーとかいうやつなんだが、俺個人でラグドールの個性がほしいんだよなあ。まあ、嘘は言つてない!

そこへミスターから連絡が入った。

『開闢行動隊! 目標回収達成!! ラグドール、バクゴーともう一人おまけで捕まえたぜ。名前は常闇。予定通り、この通信後5分以内に《回収地点》へ向かえ!』

俺はそれを聞き、緑谷達の方を向いた。

「おっと、ラグドールだけじゃなくてバクゴーと常闇も捕まえたのか」

「かつちゃんに常闇くん…!?!」

「んじや、緑谷。俺は帰るから、せいぜいそいつの相手でもしてな」

そう言い、俺は黒霧の個性で雑魚脳無を出した。そして俺は姿を消して、《回収地点》へと向かった。すると、トウワイスと荼毘がもう来ていた。

『あ、トガちゃん!』

トガがやってきた。

『トガちゃん、何人の血を回収できたの?』

「5人です!お茶子ちゃんと梅雨ちゃんと、後は耳タブがイヤホンの子と、殆ど透明な子!あと、なんかよくわかんない肉片見たいなのです!」

「そうか…あ、そうだ。黒霧が来たら、お前ら先に帰つてろ。俺は今からスピナー達の回収に行くから」

そう言い、スピナー達がいるであろう方へと向かった。黒霧の個性を使い、すぐに向かった。すると、プロヒーローを倒したようで、マスクュラー達がいた。

「お前ら、帰るぞ」

「マジか、もつと暴れたかったんだが…」

「コイツらが回復すればまた暴れればいい。んじや、お前らこの中に入れ。帰るぞ」

そう言い、黒霧の個性を使って三人を回収し、バーへと向かった。バーでは嬉しそう

にはしやいでいる用とトウワイス、そして椅子に縛られたバクゴ。色々カオスなバーになっていた。

「つと、黒霧。茶毘の脳無を俺の小屋の方に移しててくれ」

「わかりました。ですが、それはどうして?」

「ん? ああ、ちよつと面白い物を手に入れてな。俺の脳無と一緒に改良しようかと思つて…」

「私も行く〜!」

「わかりました。では、いきましよう」

そして俺とイフ、黒霧は山奥の小屋へと向かった。

個性を組み合わせる

山奥の小屋へと脳無を改造するために来た。山奥の小屋に来た理由は3つだ。あ
ときの脳無は殴り飛ばされた。だが、今回はしつかりと回収できた。

「何もされてなかったらいいんだが……つと、これは先生や博士に報告だな」
脳無の背中に見知らぬものを見つけた。

「こんなの行く時はなかったよ？」

「やっぱりな……発信機……だろうから、これで罫を作ろう。茶毘には悪いが、この脳無はも
う捨て駒だ」

俺の脳無の背中を見たが、同じようなものは見当たらなかった。

そして、大量の培養液がある水槽の中に茶毘の脳無を入れ、そこにバクゴアの個性を
増やして、脳無につけた。先生がたまにやる同じ個性を同時発動させる。

「さ、コイツのことで先生達に話をしに行くぞ」

「ハイハイハイ！それじゃ、先生の場所まで連れて行くね〜！」

そして黒霧の代わりにイフがワープゲートをしてくれた。そして先生と博士にすぐ
にこのことを話した。

『畏か…それはいいねえ、いい考えた』

「ぬう…あの脳無を失うのは結構嫌なんじゃが…まあ、忌々しいヒーロー共を排除するためと考えれば…安いものじゃ。茶毘専用の新しい脳無を作ろうかのう」

「あ、そこでなんだが…茶毘の脳無は俺に作らせてくれねえか？」

「ふむ…まあ、いいじやろう」

博士の許可も貰えたので、俺は茶毘専用の脳無、そして俺の脳無の改良を始めた。茶毘にはもう話した。その時、マスキュラーとマグ姉が腕相撲をしている横で茶毘とミスターがマジックのような物をバクゴに披露していた。それを見たいと、イフがバーに残った。そのため、俺は一人で全てをやらなといけない。

「……………さて、これをどうするか…」

俺の脳無にマスキュラーの《個性》と常闇の《個性》を混ぜ合わせた新しい個性と《軟体》をつけ、茶毘の脳無の個性は以前の《殆ど同じだが、そこにピクシーボブの《個性》をつけた。

「……………」

俺はマスキュラーと常闇の《個性》を混ぜ合わせた個性の名前を《闇筋》にし、改めて俺のネーミングセンスが死んでいるということがわかった。

「……………さて、脳無、試しだ。《闇筋》を纏え」

そう言うと、黒っぽい紫色の筋肉が俺の脳無の上半身を覆う。そして顔まで包まれ、カラスのような顔に変わる。そして俺は試しにマスクユラーの《個性》と轟と言うな生徒の《個性》を組み合わせ、脳無につけた。そして、さっきと同じように脳無に纏うように言った。すると、脳無の右腕から冷気、左腕からは熱気が出てきていた。どうやら、組み合わせる個性によつて、纏う筋肉が違うようだ。

それから俺は色々な個性を組み合わせていった。マグ姉とマスクユラーの個性を組み合わせた磁力を扱う筋肉は人だけではなく、周りの金属をも引き寄せ、腕に巻き付けるようにくつつく。ダメージはないようだ。

「個性を組み合わせると、元の個性も変化する…？」

色々の実験が成功し、それを全て博士に資料として提出した。博士は物凄く喜んでおり、黒霧で博士のところからはバーに戻るときも嬉しそうに叫んでいた。

ハロウイン限定の番外編!!

ここは何処かの地下。この場所は俺達《敵連合》のアジトでもある。そして今日はハロウインだ。

「それぞれ仮装……って、お前らそれ全部ヴィランスーツじゃねえか……」

ヴィランスーツ、それはヒーロースーツがあるようにヴィランにもスーツがある。いわゆる戦闘服というやつだ。

弔達全員が戦闘服に着替えていた。

「ハロウインっておばけとかの服を着るのが普通だぞ?」

「いやいや、俺達は一般人じゃなくて、ヴィランだからな」

ここには男子メンツしかない。なぜなら女子メンツの着替えを男と一緒にしてしまつたら大変だからだ。

「で、なにするんだ?」

「つと、そうだった。お前ら、お菓子は準備してあるよな?」

「勿論だ! ねえよ?!」

そこへおばけや魔女の仮装をしたイフとトガがやってきた。

「みんなトリック・オア・トリート!だよ!!」

「お菓子くれないきや血を見せてです!!」

おい待てトガの持つてるそれはマジもんのチェーンソーじゃねえか!!

「待てトガ!それは置け!!じゃないとお菓子はやらんぞ!!お菓子と血、どっちが大切なんだ!!」

そう言うスピナーにトガは満面の笑みでこう答えた。

「血です!!」

「まあまあ、トガよ。そのチェーンソーは置いていけ。これだと血も綺麗にならん」

「そうなんですか?!始めて知りました!!」

そして俺はトガとイフにそれぞれお菓子をあげた。

「それで?今日は街で暴れたりしないのか?」

「ふっふっふ……今日はなあ、俺達《敵連合》は休みだ!!その代わり、地上では下級脳無が暴れ回ってるぞ」

「どこで?」

「んなもん遊園地に決まって「ないよ!!」いった?」

すると、後ろからイフにスパアンと叩かれた。それを見て、全員に笑われた。

「あ、私達二人でお菓子を作りました!」

「マグ姉は？」

「マグ姉は博士のところまで武器の強化だった！だから、私達二人で作ったの!!」
「参考までに聞こう。どんなの？」

俺が聞くと、二人はそれぞれ違う感じのクッキーを作っていた。

イフが作ったのは黒く輝くクッキーで、トガが作ったのは真紅に輝くクッキーだ。

「さ、みんなは私とトガちゃん、どっちのクッキーがいい？」

「……………」

「す、スピナー？」

「お前……まさか……!!」

すると、スピナーがスツと立ち上がり、地上へと扉へもうダッシュした。

「駄目だよ！まだクッキー選んでないじゃん!!」

個性が俺と共通しているイフにはマグ姉の個性が使えるため、スピナーは男、イフとトガは女。なので、スピナーは磁力で引っ張られ、トガの前まで連れてこられ、真赤なクッキーを食わされた。

「さ、他のみんなは？」

そこでトウワイスが突然手を上げた。

「イフのクッキーを食べたら、イリスが嫉妬すると思うぞ!!イリス、お前が身代わりだ

!!

「確かに！」

「……イリス、後のことは頼んだ」

「お、おう。とりあえずイフ、ここじゃなんだし…部屋行こうぜ」

「はーい!!」

今回、イフのクッキーは当たりで、チョコクッキーというやつだった。逆にトガのがアウトで、戻ると吊達が真白になって倒れていた。

やらかしミスター

俺は今、フードを深く被り、病院に来ていた。スパイによれば緑谷がここで寝ているそうだ。煽り程度のお見舞いをしにきた。

病室のドアを開ける。そこには緑谷がベッドの上で体を起こしていた。

俺は静かにベッドの隣へと向かう。

「貴方は……」

「この声でわかるだろ？」

「お前はっ!!？」

「おっと、ナスコールはやめろよな。まあ、俺の名前を言っただけだと思っただけだ。俺の名前はイリス。よろしくな？」

「……………」

睨みつけてくる緑谷。フードを深く被ってるせいで、緑谷の顔が見えない。

「今回はお前に忠告をしにきただけだ」

「ちゅ、忠告……?」

「お前はヒーローが好きだろうか? そのヒーローが死ぬのは嫌だろうか?」

「あ、当たり前だろう！お前達と違って「あーあー、少し落ち着け」……」
俺は人差し指を立てる。

「ヒーローに死んで欲しくないのなら、お前のクラスメイトがつけた発信機が示した場所をヒーローに教えないことだ」

「っ!!」

「まあ、ヴィランの言う事を信じないのは勝手だがな……」

「な、なんでそんなことを……教えてくれるんだ……?」

「は?理由?そりゃ……俺の嫁にそう言われたからだ」

「嫁?!既婚者?!」

「そんなに驚くことかよ……ちなみにだが、さっきいった情報を警察とかに言ってもいいし、言わなくてもいい。んじや、そろそろ帰らせてもらおうわ」

「……イリス、最後に聞きたいことがあるんだけど……」

帰ろうとしたら、緑谷に止められた。振り返り、緑谷の顔を見る。

「君は……何者なの?ヴィランなの?」

そう聞いてくる緑谷を鼻で笑う。

「ご存知の通り、俺はヴィランだ」

そう言い、病室から出る。出たときに、ステインのときも一緒にいた紅白髪、メガネ

などとすれ違った。紅白髪が怪しげに俺を見ていた。俺は気にせずトイレの方へと行き、監視がカメラがないことを確認して、黒霧を呼んで帰る。

バーに帰ってきて、すぐにトガのナイフが飛んでくる。人差し指と中指でナイフを挟むように取って、刺さるのを防いだ。

「なにしてんの？」

後ろを見ると、スピナーがリンゴを頭に乗せていた。

「投げナイフの練習です！」

「投げナイフはわかるが、なんでのをリンゴに？」

「リンゴを食べたいからです!!」

「普通に食えよ。あと部屋でやるな。ワインとかに当たったら、全部お前の貯金から抜き取るからな」

「貯金箱はダメです!!」

「ならやめろ」

「はい……」

そう言うのと、トガがナイフをしまい、スピナーからリンゴを取って、綺麗に切って食べる。

「おいトガ！俺にもくれえ!!」

「梨もありますよ!」

「ならリンゴでいい!」

そう言い、近くのダンボールからリンゴを1つ取ってマスキュラーに投げ渡す。受け取ったマスキュラーは大きく口を開けて齧り付く。

「あれ、イフは?」

「茹で卵作るとか言って電子レンジ3回爆発させたぞ」

「今は?」

「マグ姉が作ってるのを間近で見てるぞ」

すると、キッチンの方から熱々の茹で卵が飛んでくる。俺は顔を傾けて避ける。すると、爆豪の顔に直撃した。

「クソヴィラン!避けんじやねえ!!」

見ればその茹で卵は君が黒くなっていた。キッチンの方へ行くと、イフが普通の真つ白な卵を食べていた。どうやら、先程卵を投げたのはマグ姉の方だったみたいだ。

「あ、見てみてイリス!綺麗に向けたよ!」

そう言い、近くにくる。

「そうだな…ちなみにマグ姉、さっきの卵なに?」

「あれはイフちゃんが茹でる前に触っちゃったので…」

そう言えば、投げられた卵はどうなったのだろうか。戻って見てみると、爆豪が顔を青くしていた。どうやら、少し食べてしまったらしい。

「おいクソヴィラン…鳥頭はどうした？」

そう言われて、俺らは首を傾げる。

「常闇だ！俺と一緒に連れ去ったアイツはどうしたかって聞いてんだ!!」

「『あ…』」

そう言われて、俺らの視線がミスターに向けられる。ミスターは焦った感じで自身の部屋に向かう。そしてビー玉を持って帰ってきた。

「ごめん、忘れてたわ!」

「『おい!!』」

「黒霧！飯の用意!!」

「わ、わかりました!」

ビー玉から常闇が出され、すぐに椅子に拘束される。罰として、ミスターはさつき禁止にしたトガの投げナイフの練習の的にされることになった。

目的?知らないですね

ミスターが常闇を忘れていた次の日、そろそろ爆豪と常闇を椅子に縛り付けるのは可哀想ということ、拘束を外すことにした。

「トウワイス、やれ」

「何を?!任せろ!」

「拘束を解いてやれ」

「えええ?!任せとけ!!」

そう言いトウワイスが二人の拘束を外す。外したのと同時に爆豪が弔に個性で攻撃をしようとする。

「はい残念【抹消】」

「個性がッ?!」

「それは相澤先生の…?!」

おゝ驚いてる驚いてる。

「お前ら何が目的だ…!」

それ誰の?俺の目的?先生の目的?弔の目的?どの目的?

「目的？お前らあるか？」

「ないです」

「ない」

「ないわねえ」

「……ねえな」

「ねえな！恋人ほしい!!」

「ノーコメ」

「俺の目的か?!俺の目的はやっぱ血を飛び散らすことだな!!」

「あ、それは私もしたいです!やっぱり人の血はいいで「テメエらのじゃねえ!!」……じゃ

あ誰の目的聞きたいんですか」

爆豪はイライラしているのか、ギリギリと歯を鳴らしていた。

「テメエらのボスの目的だ!!」

「ボス…あ、イリスの目的？」

「「イリスって連合のボスだったの?!」」

「え？言っただけだったっけ？」

「「聞いてない!!」」

「イフ…俺言っただけだったっけ？」

「言ってなかったと思うけど?」

「……………」

そ、そんなバカな…俺、言ってなかったっけ?

「ああ…俺の目的?」

「テメエがボスならさっさと言いやがれ!!」

「えええ?人に物を頼むときはちゃんと経緯を表しなさいよ」

「誰がテメエらなんか!!」

「え、なに無理なの?」

「出来るわ!!」

「じゃあやれよ。ほら、ほら」

「うぐっ…いい、言って…くだ「なんでヴィランに敬意を払わないといけないんだ?」あ…」
本当にしようとしていた爆豪が面白かったようで、イフ達が口元を抑えて震えていた。

「俺は…何を「「ブフオツ!!」」笑ってんじゃねえ!!」

「イフ、大丈夫か?」

「う、うん…だ、大丈夫…ちよつと面白くて…」

「おい爆豪!女の子に吹かせるなんて、バカなんじゃねえの!?!」

「濡れ衣着せんじゃねえ！テメエがやれって言ったんだろうが！！」

楽しく話をしていると、弔が注文したのであるうピザ屋が来た。トウワイスがドアを開けようとしたときだった。壁が吹き飛んだ。

「ヴィラン共…我々が来た！！」

「ヒーロー…社会のゴミが！！」

それ爆豪と常闇に言うべきじゃない？

『それはそうだろうけど、ヒーロー来ちゃったよ！戦わないと！！』

まあまあ、落ち着けイフ。あたふたするところも可愛いけど、こっちには策があるんだ。

『策？……あ、あの緑谷出久くんに言っていたアレだね！』

緑谷が伝えていなかったらの話だけだね。

名前なんてあってもなくても別に困らないだろう。

扉が豪快に、いや壁ごと吹き飛び、ヒーロー達が入ってくる。木の枝のような物が伸びて、トガ達の体を縛る。黒霧が脳無を出そうとした。だが、ちっこい爺さんが黒霧を気絶させた。出口も入り口も無くなり、逃げ場なし。

イフは静かに俺の体内へと入り、姿を見られる前に入ってくれたおかげで、壁の破片が直撃することはなかった。

「イリス!!」

「はあ…仕方ねえなあ…」

俺がそう言うと、外から爆発音が鳴り響く。これは脳無の養殖場の爆破音だ。そして、緑谷の友達がつけた発信器付きの脳無がいる場所。

「ミッドナイト? ミッドナイト!? ミッドナイトからの通信切れました…!!」

「なっ?!」

「他のヒーローからの通信も途絶えただど?」

コイツらは馬鹿か。ヴィランのアジトだぞ。何も無いわけないだろう。

「弔! お前らは先に行ってる!! マスキュラー!! やれ! サポートは任せろ!!」

「おお……！NO。1と殺し合いだああ!!」

マスクユラーが赤黒いオーラを纏い始めた。遊びではなく、本気の目をつけて縛っていた枝を無理矢理千切り、オールマイトに拳を振るう。オールマイトと真向の殴り合いが始まる。打つかり合う衝撃でバーが崩れようとしていた。

「脳無!!」

俺が改造した脳無の1号機を出す。正直、時間稼ぎにしかならないが、弔達を逃がすには十分だろう。

1号機を今までと同じと考えていたヒーロー達は力任せに力を振るう。だが、この脳無は他の脳無も決定的に違うところがあった。

『ヒーロー……倒す!!』

発声器官を作るのは非常に難しかったが成功し、しかも明確な自我を持った脳無だった。

「今ここでお前に名をつけよう。お前はギドラだ！ギドラよ、この場にいるヒーローを他の脳無と共に殺せ!!」

『ギドラ……私の名前……!!』

ギドラが木の枝を握り潰そうと触る。すると、ギドラが触れたところからい炎が枝を伝ってヒーロー達のところまで走る。

「シンリカム「余所見するんじやねぞ!!」んぐっ!!」

「オールマイトを殴り飛ばし、マスキュラーが拳を突き上げて勝利ポーズを取る。

「サポートしなくてもよかったな…」

「感謝してるぜ、この個性!!」

「ふっ…ならマスキュラー、オールマイトを殴り飛ばせたんだ。逃げるぞ」

「おう…つて、アイツはどうするんだ?」

「ギドラは…」

『ヒーロー…ココデ根絶ヤシニスル…!!』

残る気満々のようだ。俺は黒霧のワープ個性を使って弔達と合流した。合流した先は街のはずだったのだが、更地と化していた。

「おお…！イリス遅いぜ！ヒーローに捕まっちゃったかと思っただぞ!!捕まってなくてよかったぜ!!」

「そうですよ！イフお姉ちゃんが捕まったら嫌です!!」

「つってもな…部下を守るのも一応上司の役目だからな…」

『イリス、来たみたいだね』

ガスマスクのような物をつけた先生が立っていた。

『イリス、イフ、弔、早く逃げなさい。もうすぐヒーローが来る』

すると、先生が手のひらを月に向けた。何をしているのかと聞く前にオールマイトが飛んできて、先生がそれを風圧で防いだ。

「全てを返してもらおうぞ!! オール・フォー・ワン!!」

『また僕を殺しに来たのかいオールマイト?!』

「先生…!!」

『イリス、ワープゲートで逃げるんだ。行き先は何処でもいい。さあ、早く!!』

俺はワープゲートを開いた。行き先は昔、俺とイフが見つけた小屋の場所だ。

「させん!!」

『それはこちらのセリフだよオールマイト』

開いたゲートに俺達は入ろうとした。だが、爆豪と常闇が反乱を始めた。

くギドラく

イリス、イフ
 パパ、ママによって生み出された私に名前なんてなかった。だけど、今日、名前をつけてもらった。お父さんによると、私の個性は《ギドラ》って名前らしい。雷雲を操り、傷をすぐに治すほどの再生力を持ち、周りの電気を吸い取り、体の中で電気を貯めることが出来る。それを光線にしたり、武器にすることが出来る。そして背中から翼を生やし、飛ぶことも出来るって言っていた。

さつき、枝が燃えたのは私が枝の中に電気を流したからだ。

『ヒーローを倒して、褒めてもらうんだから…!!』

周りの家々から電気を吸収し、一気に放つ。ピカツと光り、周りの電柱や警官やヒーローが持っている電子機器を全てショートさせる。

『誰もここから通さない!!』

そうは言ったが、先程オールマイトには逃げられてしまった。お父さんに謝りに行かないと。

「脳無が自我を持っているなんて…」

「コイツを早々に仕留めて、オールマイトのところへ行くぞ!!」

『誰も行かせない!!』

くイリスく

爆豪達が抵抗し始めた。だが、俺は爆豪達の個性はコピーしてある。

「弔！ソイツはもういいから、早く逃げるぞ!!」

「ツ!?……………仕方ねえ」

俺が言うと、弔達全員ゲートの先へと潜っていった。全員が潜ったあと、俺も潜ってゲートを閉じた。

くオール・フォー・ワンく

イリス達が逃げたのを見ながら、オールマイトの攻撃を防ぐ。

『衰えたねえ、オールマイト』

「はあ……はあ……貴様もな!!」

オールマイトが言っているのは確かだ。だが、オールマイトは見てわかるほどに弱くなっていた。

『もう残り火もないんだろう? その聖火は』

「……はあ……はあ……」

『君を見ていると誰かを思い出すよ。誰だったかなあ……』

オールマイトと関わりがあり、僕と戦った人物。

『………ああ、そうだ。志村奈々だ』

「ツ!!」

オールマイトが振るう力が増す。どうやら、逆鱗に触れてしまったようだ。

「貴様が!! その名を口にするな!!」

顔が殴られて血が飛び出る。それを好機として、オールマイトを風圧で吹き飛ばす。

だが、志村奈々の知り合いに助けられる。

『邪魔は良してくれよ…』

まあ、いいかな。ん？お、オールマイトの後ろに逃げ遅れている人がいるじゃないか。僕は着地したオールマイトに風圧を飛ばす。オールマイトはそれを避けようとした。

『避けてもいいのかな？』

「ツ?!」

後ろに人がいるとようやく気づいたようで、オールマイトは風圧を受ける。土煙で見えないけど、僕にはわかる。

『さあ…オールマイト、晒せ！その醜い姿を!!』

トウルールホーム、オールマイトの本当の姿だ。オールマイトが面白いの物を見せてくれたんだ。こちら面白い物を出そう。

『……………オールマイト、死柄木弔はね、志村奈々の孫なんだよ?』

「は…?」

『この際だ、イリスやイフについても教えてあげようかな?イリスは君の弟子、緑谷出久くんの従兄弟、イフはエンデヴァー、彼の従兄弟の娘だよ』

これは僕が調べてわかったことだ。イリスは《緑谷裕翔》、イフは《轟玲奈》と言う名前だったらしい。

今のエンデヴァーと同じように子供には自分を超えてほしかったようだが、イリスと

イフは無個性という診断結果になり、家庭内暴力が発生。そのおかげで二人はヒーローではなくヴィランを行く道を進ることになった。

茶毘については彼から口止めされていた。イリス達はもう自分の名前すら思い出せないだろうから、僕がここで言っておけないとね。

「うそだ…そんな…」

『本当の事だよ。オールマイト、彼らはそもそもいた事自体知らないだろうけどね』

ふふふ…イリスやイフは素晴らしい存在となったよ。産んだ親には感謝しないからねえ

『おしまいにしてようオールマイト』

オールマイトに止めを刺そうとした。だが、周りにヒーローが集まってきていた。

「どういうことだ!! 従姪がヴィランだと?!」

『気になるならば、調べてみるといいさ』

「ツ!! エンデヴァー…!!」

さあ、第二ラウンドだ。オールマイト。

くイリスく

ギドラの回収には成功した。ギドラが、娘がエンデヴァー達に倒されてなくてよかつ

た。

『パパ…ママ…ごめんなさい……ヒーローを止めれなかった…』

「いいや、お前は良くやったよ」

『うん。一回失敗しちゃったただけだもん。まだ何回でも再挑戦出来る。だから、ギドラ帰ろう！私達の家…!!』

『…！はい!!』

イフはギドラを優しく抱きしめた。ギドラがちゃんとした俺とイフの娘だ。これからずっと。

『そういえば、名前で思い出しちゃったけど、私達の前の名前ってなんだっけ?』

「さあ…？裕翔と玲奈…それしか覚えてないなあ…」

『忘れたってことはどうでもいいってことだよね!』

俺達にとって、自分達の昔の名前なんてどうでもいい。今の名前で十分だ。俺はイリス、そしてコイツはイフで俺の妻。この娘はギドラ、俺達の娘。それだけ分かればいい。

脳無だつて喋ります

アジトを失つて以来、俺達はある一軒家の中で過ごしていた。ここは《市民脳無計画》で脳無となった家族の家だ。

「まさかこんなところで役立つなんて…」

「思わなかつたね。それで、これからどうするの？先生、捕まっちゃつたし」

「ドクターは手伝う準備があるとかで、今は忙しいらしい。それまでは俺が先生の代わりに指揮する」

「それは別にいい。それよりもこのガキなんだ？」

「娘ですが」

「むすつ?!お前ら子供いたのかよ?!」

「いるぞ。ちゃんと血も繋がっているし」

「全然似てねえ…」

酷いなこいつら、見ろトガなんて目をキラキラさせて見てるぞ。

「おう、トウワイスはどうした？」

「確かに今日は一度も見えてない」

「どうでもいい」

「おいー!」

確かに今日はトウワイスを一度も見えていない。というかそもそも起きているのかすら知らない。

「パパ、パパ! ニュース、ニュース見て!」

ギドラに言われてテレビを点ける。するとちょうど良いタイミングでニュース番組が始まる。見出しにはN.O.ヒーローが引退したことについてだった。

「先生…」

「死して尚、生徒の脅威であるオールマイトを消してくれるなんて…」

「死んでないからやめろ。その言い方は」

「それにしても、次のN.O.ヒーローはエンデヴァーか」

「……………」

今、明らかにエンデヴァーの名前に茶毘が反応した。そう言えば二人共個性が炎だ。エンデヴァー達と違って青い炎だが。

「なあ、なあイリス。すっげー脳無とか貰ってないのかよ!」

「ああ…いるぞ。ハイエンドって種類の脳無らしいぞ。マスキュラーの《筋肉増強》、みんな大好き《超再生》、《ジェット機》、《変容腕》、《格納》の個性を持っているらしい」

「ハイエンド……?というか脳無に種類とかあるんだな」

「ああ、量産、対オールマイト、ハイエンドの3つのはずだ」

「なあ、ソイツ俺に出来ないか? No. 1にプレゼントしたいんだよ」

「別にいいけど……良い物見せてくれよ?」

「わかつてる」

「そうかよ。ほら、このビー玉だ」

ミスターの個性でハイエンドを閉じ込めたビー玉を渡す。茶毘はそれを持って出ていった。

「ねえ、このキツチン便利!火がないのにフライパンで目玉焼き出来るよ!」

「ガスだったらイフが爆発させそうで心配だったけど安心ね」

この二人はいつたい何をしているんだ。大事な話をしていたはずなのだが、まあ楽しいから良しとしよう。

「ねえねえ、それよりもあのハイエンドってヤツ?に何か秘密があるんでしょ?教えて?」

「秘密って言うか……なんというか……あの脳無、実は物を考えて喋るんだよ」

「はっ!」

「イリスちゃん、疲れているんじゃないの?」

「そうだけ。脳無は命令を聞いて動く兵器のはずだろう？」

「いやいやいや！そんな、喋るわけないって！」

事実を言うと、全員が否定し始める。

「わかるよ？俺も最初聞いたときはこの人何歳だっけ？って思ってしまったほどに。でもな、喋るんだよ。コピーしたのがあるから見るか？」

「ドクターの血と汗の結晶が簡単にコピーされてる…」

俺はコピーしたハイエンドをリビングに出す。茶毘に渡した脳無と全く同じ物だ。

『ココハ』

「喋った?!」

「そんな馬鹿な！」

「喋ったように聞こえてるだけだろ！よく動物のそういう動画見るぞ！」

「ああ、俺疲れているんだな…きつと…」

「わあ！喋った、喋りましたよ可愛い！」

「コレ可愛いの?!」

「可愛い…」

「可愛いんだ…」

「うるせえ！イフが言ったら可愛いんだよ!!」

「「めんどくせえ……」」

イフが可愛いって言ったら可愛いんだよ。でも、これは可愛いのだろうか。俺的にはイフのほうは何億倍可愛いのだが……

その後、複製ハイエンドはミスターのビー玉の中へと圧縮されたのでした。

連合の夏（投稿する時期を考えろ作者）

イフがちよつとした椅子と俺を使って天井近くまで上がる。

「ええ〜ではヴィラン連合で虫取りをしま〜す!!」

「「は?」」

「はい、拒否権はなしね! イリス!!」

「はいはい…はあ…」

俺は弔達の真下にワープゲートを開き、目的地に連れて行く。ちなみに目的地は山だ。

「え、マジで山じゃん…」

「おい帰らせろ黒霧!」

「拒否権はなし! 黒霧いい?!」

「わかっています」

黒霧が言う事を聞いているとか不思議だな…

「ゲーム機は?」

「なし」

「山火事は？」

「ダメ！」

「環境破壊「駄目に決まってるよ！」……」

「さ、みんなこれ持つて！制限時間はギドラが寝るまで！スタート!!あ、一番凄いのを取つてきた人にはなあんど頭おかしい程に強い個性《リフレクト》をプレゼント！」

「殺ります！」

「取り敢えずへラクレスだな」

「ライ○クス持つてくる」

「世界の壁は壊すなよ弔」

意気込みだけは凄いいこの大人2人と女子高生1人。トガ、茶毘、弔。早速虫取り網と虫籠を持ち、いざ山奥へと駆け走ろうとした時だった。

「あ、ちなみに一番しよーもないのを取つてきた人には人探しをしてもらおうからね！連合に入るかって賛否も聞いてね!!」

「「「え？」」」

「相手は最下位にだけ教えるね！ちなみに審査委員は私、ギドラ、黒霧ね！よーい………あ、あと一番大きくて珍しいのとかがいいよ！ドン！」

ドン？え、よーいは？へ？よーいドンじゃないの？

「あれ？行かないの？」

「もう始まっているのかよ!?!」

そうだった…ちゃんとよーいって言ってたわ…

「一番デカくて珍しい……………こ、コイツは?!」

くユキ

さあ、やつてきたよ虫取り大会！勝手に大会にしちゃったけど大丈夫だよ！それについて言わないと虫取りなんてしないだろうし《リフレクト》って個性は実際に手に入ってるし、大丈夫だよ！まあ、イリスに渡す予定だから、どのみちイリスと誰かっとなるだけだし。それにイリスなら全員に配ることも出来るからね。

「あ、黒霧、弔の観戦視点を出して」

「はい。これです」

「ギドラおいで」

「うん！」

ギドラを膝の上に乗せて、黒霧が見せるイリス達の映像。

「ちゃんと監視しないとね、弔とかめんどくせえとか言つて山を壊しそうだから」

「賢明な判断です。おや？もうトゥワイスが帰ってきたようです」

草むらからトウワイスが走ってくる。

「見てみなイフちゃん！最高の虫を取ってきたぜ！期待しないほうがいい」
そう言つてトウワイスが虫籠の中身を見せてくる。

「ひっ！」

その中には私がどうしても見ることさえ出来ない恐怖の権現がそこにいた。

「いや〜捕まえるの難しかったぜ！この蜘蛛「いやあああああ!!」えあああああああ
ああ!!」

トウワイスごと山奥へと強制転送させた。

今まであまり見てこなかった存在が突然現れたことに心臓が飛び跳ねた。久々の感
覚に少し狂わされそうになる。

「だ、大丈夫ですか?!」

「……………よ…」

「は?」

「最下位はトウワイスで決定だよ！例えイリスがどんなのを捕まえても、例え茶毘が焦
がした虫を持ってきても、例え吊が世界の壁を壊してラなんちゃらを捕まえてきても!!
トウワイスで決定よ!!」

「ママ、ママ！御乱心!!」

「ギドラ、何処でそんな言葉を身に着けたの?! 黒霧! 茶毘の視点!!」

気を取り直すために茶毘の視点を映す。そこにはセミを燃やしながら歩いている茶毘の姿があつた。何か喋つてるようで口が動いている。

「音声も出しますか?」

「うん、お願い」

黒霧に頼んで映像と共に音声も出してもらうことにした。

『いやゝにしても、あのハイエンドどうしようかな。No. 1に不意打ちでプレゼントとしてやりたいな。家にするか? いや、家はやめておこう。やっぱデート中とかにするか!』

「次……」

「次は弔です」

『蝶……蝉……桑潟……蟻……蝗……蠅……: 蝸牛……蟋蟀……: 螢……: ……ハッ! 見当たり次第捕まえればいいんじゃないやね? 俺天才か?』

「虫取りだからね?! あと蟋蟀と螢は夜だと思ふよ! 次!」

「スピナーです」

『これはまさか……殺しを楽しみ、人である心を忘れた連合に対する挑戦なのでは?! 虫を人間だと思ひ、殺さずに生かす……』

「次……」

「マスクュラーです……」

『あ、やつべまた加減ミス「次!」』

「Mr. コンプレックスです」

『よし、これで53匹目。個性を使つてはいけないなんてルールはない。つまり虫籠に圧縮させた虫を大量に入れれば勝ち。そしてここには蟻の巣が!!』

「蟻しか捕まえない気?!嘘だよね?!」

「次はマグネ……と行きたいんですが、もう来ましたね」

マグ姉が山奥から戻ってきた。虫籠にはヒラヒラと何かが飛んでいる。

「綺麗!」

「コガネムシですか。いいですね」

「すごいでしょう?もうたくさん来ちやつてえ大変だったのよお」

「いいね!今のところ一位だよ!ギドラは虫見るの初めてだよね。これはコガネムシつて言つて……」

「食べれるの?!」

「あ、食べちゃ駄目だよ!」

危ない危ない。子供に虫を食べさせちゃうところだった。

その後、弔が本当に見当たり次第虫を取ったようで、カブトムシにクワガタムシ、バツタやカマキリなどを大量に捕獲していた。

茶毘は何処で見つけたのか、ヘラクレスオオカブトを取ってきた。日本にいるって聞いたことないけど、本当に何処から取ってきたのだろう。

マスキュラーは無難なカブトムシ。ミスターは蟻を大量に。スピナーは蝶。そしてトガちゃんも赤く染まったノコギリクワガタを取ってきた。

「あれ？イリスは？」

「おーい！」

「あ、ちようど帰ってきたみたい」

「パパが捕まえた虫ってなに?！」

「聞いて驚け!!これだ!!」

イリスの虫籠の中には金色に光るカブトムシが入っていた。

「え、なにこれなにこれ?！」

「す、凄い輝きだ:!!」

「こんなの見たことないです!!」

「ま、眩しい:」

「茶毘こっちは光が来ないぞ」

「つかこんなの何処で手に入れたんですか?!」

「え?木の中に入ってたけど。それよりも最下位って誰?」

「トウワイスだよ」

「んでそのトウワイスは?」

イリスが持つてきた黄金のカブトムシに目を釘付けにされて、忘れてしまっていた。

「イリス、トウワイスの上にワープゲート出して。あと、その紙の中身を見ずにトウワイスの上に落として」

「ん?わかった」

ふふふ、先生が言っていた助っ人になるかもしれない人物が見つかるといいなあ〜見つかるまで帰ってこないようにって書いたし、ここからはトウワイスの索敵能力が何処まで凄いか見物だなあ〜

「さ、ギドラ帰ろっか。凄い個性をイリスが見つ付けてくれたから、今日からご飯は美味しいよ!期待してね!」

「どんな個性なの?」

「ふっふっふ…個性は《シェフ》だよ!イリスが色んなレストランを訪ねたりして料理関係の個性を全て詰め合わせた個性!これでパンから白米、味噌汁、唐揚げや天ぷらも作れちゃうよ!!」

そう言うと、弔達の目の色が変わった。目の色が変わってから虫を逃がすまでのスピードが可怪しかったのは関係ないよね。

治崎登場

（イリス Side）

トウワイスから連絡が来て、罰ゲーム？の探し人を見つけたとの事で、俺達は集合場所である巨大な倉庫へと着ていた。

「で、義爛じゃ無理だったのか？」

「うん。別の用事で今忙しいんだって」

入口の奥で車が止まる音がした。ドアが開かれ、トウワイスが入ってきた。

「よお！みんな帰ったぜえ！」

その後ろにはペストマスクを着けた男がいた。

「とんでもないのを連れてこさせたな…イフ」

名前は治崎廻。先生の資料で一度だけ写真を見せてもらったことのある男だ。

「埃っぽいな…用件はなんだ」

「用件って…おいトウワイス、連合に入るか確認してから連れて来いよ」

「確認忘れてたごめん!!入確認したけど忘れてた!!」

溜息を吐きながら座っていた荷物棚から降りて治崎に挨拶と謝罪をする。

「うちのがすまない。連合に入るかも決めてないのにこんな埃っぽい場所に連れてきてしまつて」

「……それよりも連合に入ったとして、計画はあるのか?」

「ああ、あるぞ。内容は今は話せないが、仲間に加わつたら話す」

「今話せ」

「無理だ。それほど貴重な計画なんだよ」

「……ならばこちらは無理だ。ここで内容すら言えないヤツの下で働きたくない。俺には計画がある。この世界から個性を消すことが出来る計画が……どうだ? 悪いようにはしない。俺の部下に……」

治崎が最後まで言う前にマグ姉が武器を構え、治崎に殴りかかろうとした。治崎はすぐさま手袋を外そうとした。

「ごめんね極道ちゃん! 私達、誰かの下に着くのは嫌なのよ!!」

まずいつ!! 治崎の個性は先生の資料によると……!!

俺は個性【重力変換】と【触手】を使って、マグ姉を地面に叩き落とす。

「っ?!」

「マグ姉!!」

「悪いマグ姉、相手が悪過ぎる。お前は大事な仲間だ。ここで失うわけには行かない

……すまない。またうちの仲間が失礼な事をしてしまった」

「いや、大丈夫だ。埃も舞つてないし、触られてないから何も起きていない」

「まあ、取り敢えず話はまた後日でもいいか?」

「いいだろう。これ、連絡先だ」

そう言つて渡される名刺。俺はそれを受け取つてポケットに入れる。治崎は仲間が迎えに来るとのことで、俺達は先に家へと戻つた。

「おいイリス!なぜマグ姉を叩き落したんだ!普通に止めろよ!」

「あ、それは悪い。相手がアイツだからな、実力行使で止めないといけない気がするな」
「極道つてなんですか?」

「極道つてね、私達 ザイラン 敵が蔓延るずっと前から夜の街を支配してた存在だよ!」

俺は名刺に写っている写真からオーバーホールをコピーした。

「久し振りに見たかも」

「そんな個性あつたな。忘れてたわ」

「イフは許す。ただし弔お前は駄目だ」

「は?!」

オーバーホールの人形から個性をコピーし、みんなに披露した。

「ヤツの個性はオーバーホール。書いて字のごとく、ヤツは再生と分解の個性が入り乱

れた物を持っている。発動条件は不明。だが、あの手袋からして《手》が関係しているだろう」

「それはつまり…」

「あのままマグ姉が突撃したらお前の体は分解されていただろう」

「んま！そんな強いのか？」

俺は試しにコップで個性を発動させた。コップは綺麗に粉々に変わり、そしてそこからコップの再生をした。

「つまり、弔の上位互換ってこと?!」

「ああ、そうだ！「だからどこがだよ!!」

「何処でもいいだろう？」

後日、トガとトウイスが極道き行くことになった。

本当に悪なのかわからない連合

「イリス〜!!」

突然イフが背中に飛びついてきた。

「個性の融合開発は順調?」

「順調、順調。まさか《筋肉増量》がここまで汎用性のある物だと思わなかったよ」

今のところ作れた個性は全て俺と脳無に入っている。

「トガちゃん達大丈夫かな?」

「大丈夫だろう。一応あの二人には護身用の脳無を一匹ずつ持たせている」

「ふくん……………あ、そうそう! 治崎って、個性を破壊させる薬を作ってるんだって!」

「え、そうなの?」

俺は実験をすぐに止めて、リビングの扉を豪快に開ける。

「お前ら! カチコミだあ!!」

リビングでは弔と茶毘、あとスピナーがゲームに集中しており、マグ姉とマスキュラーは何かの話をしていた。

「……………お前ら!! カチコミ」「聞こえてるから黙れ!!」「…」

もう一度言おうと、弔達から批判を買った。

「どうかしたのかよ」

優しく声をかけてくれたマスキュラーとマグ姉、俺はソファアに座って話す。

「なんか、治崎が個性を破壊する薬を作ってるらしい」

バキッ

そう言おうと、ゲーム組のほうから有り得ない音が聞こえた。見ればコントローラーが見るも無惨な姿になっていた。マグ姉も驚いた顔をしていた。

「おいイリス、今なんて言った？」

「イフ曰く、個性を破壊する薬を作ってるらしい」

「うん、これがその動画」

そう言っつて、イフがパソコンを開いてUSBメモリのファイルを開く。中に入っていたのは映像だった。

再生してみると、変身型の個性の人に薬を打つ動画。なのだが、薬を打った途端にその変身型の個性が強制解除される。何度も変身しようとしたが無理だったようだ。

「それで、これがそのサンプルだよ。まだ未完成だけど言っつて言っつてた」

針が着いた小さな弾。どうやらこれに入っているらしい。

「これ、増やせたらヒーロー根絶やしに出来るのでは？」

「いやいや！流石にイリスや博士でも増やすことは……」

「俺はできない。だけど、博士なら可能かもな」

「……………」

沈黙の空間が広がる。正直、治崎の計画には反対でも賛成でもなかった。だが、この薬が世界を変えることはそう難しくないだろう。俺達と治崎の目的は一緒だ。今のこの世界を変えること。

「……………変な要求されたら困るし、出来上がったらサンプル強奪するか」

「弔に賛成だ。リーダー、流石に正面は無理だと思うぜ」

「まあ、それは俺も思っているがその……トガ達に通信機なんて渡してないからさ、出来上がったかどうかかわかんねえ……」

「このポンコツリーダー」

「うるせえ！」

ちなみに、コイツらは後にコントローラーが壊れたことにショックを受けて、コンプレックスに修理を頼んだが、まず原型を留めてないので無理らしく絶望していた。

「お願いしますイリス様あ……」

「何卒、何卒……コントローラーの修理を……」

「……………いや無理だろ」

俺は無慈悲にも壊れたコントローラーを捨て、新しいコントローラーを渡した。すると神を崇めるかのように仰いでくる。

「あ、そうだ。弔達に言っておくけど、連合の予算的にもそのコントローラー壊したら次ないからね」

「これ連合の金なの？」

「うん。だから、次壊したら資金集めしてもらおうからね」

「「ヒイツ!!」」

弔達を脅した後、イフはいつもの優しい表情に戻った。

「あ、そうそう。雄英ってそろそろアレらしいよ。仮免?を取るために忙しいんだって」
「なら…潜入捜査だな。だが、トガはいないから…:トウワイスの個性で増やして、潜入捜査させよう。イリス、やってくれ」

「へいへい…:…って、なんでお前が仕切ってんだよ弔!」

そう言いながら俺は仮免について調べる。

「なんで今しないんだ？」

「今、夜、仮免大会がいつかは知らない」

「お前ならトウワイスの倍の時間は出来るだろう」

「え、今すぐさせるわけ…?」

頷く弔。俺はトガを増やし、任務の内容を教える。するとトガが色々注文してきた。まず、血を入れる要求、そして侵入するために学校の情報など。

全て調べるのに数日はかかるので、調べ終わったらもう一度増やすことにした。ちなみに、増やしたトガは調べ終わった当日に崩れてしまった。

ギガントなマキア

「ギガントマキア？」

個性同士の融合実験の連絡をしていると、博士からそんな名前が出てくる。

『そうじゃ。先生が育てた忠実なる部下じゃ』

「部下って…個性は？」

『《耐久》《エネルギー効率》《土竜》《痛覚遮断》《豪筋》《巨大化》《犬》。此奴、肉体を弄らなくても7つの個性を入れても変化なしの生きる災害じゃ』

「ふむ…そこに雄英生の《硬化》とかどう？」

『なるほど。更に耐久性を上げるのか。いい考えじゃ。だが、《硬化》はただ手足が硬くなるだけじゃなかったかの？』

「それがさ、あの《内通者》曰く、全身を硬くさせて防御力と攻撃力が向上したんだってよー。」

それを言うと博士が通話越しでもわかるほどの高笑いをした。

『なるほど。それはいい報告じゃ。それに手だけでも相当な物じゃな。よし、黒霧にワープさせよう。教育は任せてもいいかの？』

「もちろんだ。イフやギドラを連れて行っても？」

『構わんよ。ただし、殺すのだけはやめてくれよ』

「わかってるよ」

それだけいい、通話を切ってイフとギドラを探し、弔にリーダーを任せて、暫く帰らない事を伝えた。

「二人目か？」

「んな馬鹿な」

「三人目も出来たりして」

「これからどうしましょう。トガちゃん達は極道だし、ここに残るのはむさ苦しい男ばかりだし、いゝ」

「コンプレックス！これなんてどうよ!!？」

「ああ、惜しい。そこは駄目なんだ。マスキュラー、こつちから責められる」

「確かに惜しいところまでいってるわね。責められるから一度戻してもう一度考えてみましょうか」

なんとというか、本当に自由気ままに過ごしていた。そして黒霧に連れられてそのギガントマキアのところへと行く。

「おいギガントマキア！ちよつといいか？」！

「ギドラ、怖がらないで。この大男は味方らしいから」

「う、うん……」

俺はギガントマキアに話を着ける。

『オマエ、強イ……人間ジャナイ……』

「あ？何言ってるんだ。今、先生が捕まっちゃまって、俺が博士からお前を託されたんだ！座って話をしよう!!」

そう言うのとギガントマキアは近くの岩に座り込む。俺はギガントマキアの肩に乗って話す。

「ギガントマキア、今からお前に幾つかの個性を与える。それを使いこなしながら俺の娘と戦ってくれ」

『主、娘、死ヌ……』

「大丈夫だ。俺の娘はそう簡単に死なない」

『ワカツタ。戦ウ』

ギガントマキアに《硬化》を与える。先生から聞いた話だと知能が限りなく低いため、複数個性をしよう出来ると。そしてギドラも巨大なドラゴンとなり、ギガントマキアと戦う。

早速《硬化》をしようしてギドラを襲う。だがギドラは見かけに依らぬ素早さを駆使

して横に避け、空を飛び、体重全てを乗せてギガントマキアを潰す。だがギガントマキアは地中に潜っていたようで、近くの地面から飛び出してくる。

それを瞬時に理解したギドラは両肩に噛み付き、地面に叩き落とす。今度はギガントマキアの首に噛み付き、引き摺って山へと投げ飛ばす。

二人の戦いを見ていると幾つかの気付く物があった。

「イフ、このギガントマキア…本能で個性を使ってる」

「え?でも《硬化》って自分の意志で発動するんじゃない?」

「ああ、だがコイツは自分の意志で動いていない…しかも痛覚を遮断しているらしいからギドラのダメージはほぼ聞いていない!」

その証拠にギガントマキアは落ちる前に体制を変えてギドラに襲いかかる。だが、ギドラのほうが上手で、左右の首でギガントマキアを縛り、真ん中の首でギガントマキアからエネルギーを吸い取り始めた。ギガントマキアは抵抗しようとするがエネルギーを全て吸われて動かなくなる。

「死んじゃったの…?」

「いや、これは寝ているだけだな。博士に聞いてみるよ」

「それじゃ…ここら辺でキャンプでもしようか。ギドラ〜!戻ってきて手伝って〜!」

イフがそう言うのとギドラは姿を戻して走って戻ってくる。

『なに?! マキアが負けてしまったのか?!』

「ギドラにエネルギーを吸い取られて完全敗北だ。ギドラにエネルギーを吸い取る個性がなければギガントマキアが勝っていただろう」

『ふうむ… エネルギーか… 少し… いや、かなり厄介な問題じゃな。どうにかせねばな… その問題はこつちで何とかしよう。引き続きマキアの育成、問題があれば逐一報告してくれ』

「ああ、わかった。それと博士、実は個性を破壊する薬を作ってる連中がいてな、その完成品を吊達は強奪としていっているんだが… 博士は薬を作ることは可能か？」

『物によるのお… 強奪出来た時に改めて報告してくれ』

「わかった「イリス助けてえ！」… 博士そろそろ切るな」

電話を切って振り向くと、テントの骨組み作りにイフが苦戦していた。苦笑いをしながら手伝う。

イリス覚醒まであと——

明かされた事実

黒霧が捕まった。早朝に耳にしたのはソレだった。

ある日、諸事情でマキアの教育を黒霧に任せた。夜になっても帰ってこず、みんな心配していたが博士のところにいるのだと勝手に思い、その日は寝てしまった。

だが翌日、朝のニュースにてそれは報道された。

「黒霧……」

「イリス、これからどうするの?」

「黒霧が埋めてた枠は俺が塞ぐ。弔達はそのまま例の件、頼んだぞ」

「……わかった。お前らはどうするんだ?」

弔にそう言われ、ギガントマキアの事を教える。

「……ソレが先生が残した手札か」

「ああ、だがコイツは……俺じゃ扱えない。弔、お前にしか出来ない。だからコイツを扱えたらこの連合のリーダーはお前だ」

「………わかった」

そう言い、ワーブゲートを広げてマキアの下へと向かう。

く緑谷出久く

インターンの説明が終わり、ビッグ3の通形先輩との話が終えたあと、僕はオールマイトに呼ばれて仮眠室に来ていた。

「え？轟くん？」

「緑谷、お前も呼ばれたのか」

先に轟くんが仮眠室におり、ソファアに座っていた。

「待たせたね。二人とも」

オールマイトと校長先生、そして塚内さんも来ていた。

「これは二人にだけ話して起きたかったんだ」

「えっと…僕達にですか？」

塚内さんが一枚の写真を机の上に置く。見覚えのある人の写真で僕はビックリした。

「コイツは…」

「……………ヴィラン名イリス。本名緑谷裕翔」

「え?!」

「イリス、彼は緑谷少年の従兄弟だ…」

僕は驚いた。当然だお母さんから僕が産まれる前にヴィランに殺されたと聞いていた。

「我々で調べたところ、緑谷裕翔は数年前にヴィランにご両親と共に殺されたとなっていたのだが……………どうやら彼の死体は見つからなかったそうだ」

「そんな…それじゃあ…イリスは僕の……………」

「じゃあ、なんで俺をここに呼んだんですか。ヴィランの正体が緑谷の従兄弟って話なら俺は関係ないでしょ」

確かにこの場に轟くんを呼ぶ理由が…

「…これはヤツ、オール・フォー・ワンから聞いた話だが……………イリスと共に動いているヴィランがいるらしい。それがヴィラン名イフ、本名轟玲奈。エンデヴァー、彼の従兄弟のご子息らしい」

「……………」

「ご両親は火事で焼死、娘と思われる死体は発見できず……………」

「じゃあイリスが言っていた妻って……………」

「多分彼女だろう。そしてここからは当時の資料によるものだが…二人は無個性だと書かれていた。無個性ゆえに両親から虐待を受けていたらしい」

「っ?!待ってください!イリスは個性を持っていましたよ?!まさかオール・フォー・ワンから……………」

だがそれはすぐに否定された。

「彼らは元々個性を持っていたんだ。オール・フォー・ワンが恐れるほどの個性をね」

「ヴィランが恐れる個性?」

「イリスの個性はDNA採取。相手からDNAを奪うことで相手の能力を完璧にコピーし、無制限に使えるようになる」

「なんですかそのチート」

「次にイフ、彼女の個性はコピー。受けた攻撃を完璧にコピー出来る。こちらも無制限に」

「だからなんなんですかそのチート」

轟くんが言っていることに僕も強く頷く。血を採取して個性をコピーする。つまりワ

ンフオーオールをコピーした可能性が?!

「もしヴィラン連合と全面で戦うときは君達も前線で戦ってほしい。そして彼らを止めるのを手伝ってくれ」

「それはいいですけど…親父には言っていないんですか?」

「これから言うつもりさ!」

イリス覚醒まで残り——

個性崩壊の薬を強奪

トガ達が侵入してから数十日後、トウワイスからオーバーホールがヒーロー学生に負けたと連絡を受けた。

「護送車はここを通るはずだ」

「茶毘の個性で目眩まし、ミスターはもしヒーローがいたらソイツを消せ。弔が車を襲つて中に保管されているであろう個性を破壊する薬の強奪……」

「そこにオーバーホールがいたら？」

「殺すな」

そう言う弔は茶毘とミスターと共にスピナーが運転するトラックに乗って出発する。

「俺達はどうすんだあ？」

「トガ達の回収だ。それと○○地区に脳無を放つ寄生型のな」

「そんな新型脳無がいるわけ？」

「良くない?…その顔は駄目か。ならこれはまた別の機会に……」

みんなの反応を見て俺は寄生型脳無を解き放つのをやめ、素直のトガ達の回収に向か

う。

「イリスくん遅いでーす」

「なに食べてんの？」

「あ、これはそのアイスやさんで売ってました！」

「呑気だな…ほら帰るぞ。トウワイスマ」

「おう！待って俺もアイス食いたい！ちよつと分けて！」

「はい！ジンくん分！」

「マジ女神！高校生だけど！」

ワープゲートを開いて二人を連れ帰る。ついでにと弔達の様子も見に行く。

「うひゃく…熱いですね」

「なんでイカれ女達がここにいるイリス」

「ミスったわ。それで薬の回収は？」

「これだ。さっさと行くぞ」

そう言いワープゲートを開いてこの場にいるヴィラン連合全員を回収する。

「オーバーホール、お前は上に立つにはまだ早かったみたいだな。俺と一緒だ…」

次にゲートを開くと仮拠点の民家で早速トガが買ってきたアイスをイフ達が食べていた。

「やっぱヴィラン連合って結構自由だな」

「それよりも…イリス、例の脳無は何処だ？」

「ああ、地下3階の13番だ。いつでも出せるぞ」

「なら良い。確か…もうすぐ雄英が文化祭だっけな」

「文化祭?!」

文化祭という言葉にトガとイフがガバツと立ち上がる。

「文化祭行きたいです！」

「私も私も！文化祭を見たい!!」

「不良は入れないだろうよ」

「弔くんは黙ってください！」

「そうだよ！イリス、なんとかして入れない?!」

と期待の眼差しで俺を見つめてくる二人。だがヒーロー校の文化祭に入れるとは思

えない。

「ぎ、残念ながら…」

「うそっ?!」

「文化祭行きたかったですう…!」

そう悲しむ二人を横目に自分の無力さを恨んだ。

「だが変装して…行けば！」

「いや顔確認とかあるから無理だろ」

「現実を押し付けられないでくれスピナー!!」

そして雄英高校の文化祭はテレビで見ると無く、指を咥えて文化祭の様子をテレビで傍観する二人になんと声をかけていいかわからなかった俺達は誰も声をかけて挙げられなかった。

「お前イフの旦那だろ。なんとかしてあげれなかったのかよ」

「無理無理。文化祭は流石に無理だつて…」

そのまま二人は数日間テレビの前を離れなかった。

タイトル書くことなし!!

ある日、家に帰ってくると弔が少しキレていた。

「どした？」

「茶毘、アイツに譲った脳無…ありやいったいどういうことだ」

「？」

「アイツの個性だ」

「あれ？前に話さなかったっけ？《超再生》に」

「そこは前に聞いたわ。俺が聞きたいのはなんでハイエンドが腕が複製出来たかって話だ」

「なんか腕二本だけのジェットじゃ迫力がないかと…」

「はあ…茶毘は使い捨ての駒にするつもりだったらしいが…ヒーロー倒して帰ってきたら嬉しいぞ」

「そこまで強くなるか。ただ腕が四本増えるだけで結構変わるものなんだな。」

「てかハイエンド帰ってきたのか。ホークス辺りに見つかって追い掛けられたりしてないか？」

「ああ、お前には話してなかったっけな。ホークスは俺らのスパイだ」
「は？」

俺達のスパイ？ トップヒーローが？なぜ？金？

だがどちらにせよホークスがスパイをしていることは事実なのだろう。だが警戒していて損はないだろう。

「あ、そうだ！イリス、今日この後暇だよね！可愛いお店に行こうよ！わたし達は今だに顔はバレてないんだからさ！」

「ふむ…確かにそうだな。情報集めしながら行くか」

「むう…！久々のデートだよ！」

「わかってるって」

そうしてすぐに外出の準備を済ませて外に出る。出てすぐにイフが腕に抱き着く。

「イリス！まず何処に行こっか！」

「うくん…この辺りのことは良く知らないからな…」

「あ、だったらあつちの公園で遊ぼうよ！」

そう言つてイフが公園に案内してくれる。公園には子供も大人も誰もいなかった。

「ブランコ空いてる！やったー！」

そう言つてイフがブランコに座つて遊び始める。俺も隣のブランコに乗る。

「イフ、実は…マキアと弔達を会わせてみようとかドクターが言っていたんだが…弔達は勝てると思うか？」

「ふふ…天下のヴィラン連合の現ボスは部下が心配？」

「部下じゃねえ。仲間だ」

「…イリスはさ、昔にした約束覚えてる？二人でこの世界を変えようって…無個性の人が苦しまない世界を作ろうって」

「……ああ」

「今わたし達が目指してるのはみんなが幸せになる社会。トガちゃんや普通の女の子に、スピナーは普通の人間に、ミスターやマスキュラー、マグ姉や他のみんなのは知らないけどこの二人は理想の世界を持つてる」

そういうイフに俺達もだと補足を付ける。するとニコツと笑ってくれた。

「マキアに勝てたら弔達の理想に近付けるかな」

「近付くだろうな」

「そっか…うん、なら大丈夫かな」

「大丈夫ってなにが？」

「わたし、この社会を変えたらイリスのちゃんとしたお嫁さんになりたいな！ほら、結婚式とかちゃんと挙げてないでしょ？あ、結婚したらギドラが長女になるのかな！」

「ああ〜……一応長女だな」

「だよね!はあく〜早く夢を叶えに行こうよ!」

「それはまだだ。弔達が俺達に頼らずマキアに勝てたらだ。俺達はまだスタートラインにすら立ててない。まだ準備段階なんだ」

「そっか…」

ある程度話した辺りでブランコの椅子から降り、商店街とかを見て回った。

弔達はまだ知らない。マキアがどういった存在なのかを。

そしてうちの嫁は今日も可愛い

「あ、見てこれ。凄く可愛い!」

「キーホルダー?まあ、そういうのお揃いで付けるのも良さそうだよな」

「ねえねえ、わたし達オリジナルのキーホルダー作らない?」

「よ、予算があれば…」

「いつも枯渴してるね」

「まあな」

その後、いくつかのキーホルダーやストラップを買い、家に帰った。帰ってすぐに
ヴィラン連合オリジナルの物を作ろうとしたが

「俺達の仲間の証を作ろうと思う」

「モデルは俺な」

「おいおい待てよ。ここはみんなのチャームポイントをつけようぜ」

「可愛いものがいいです」

「同じく！」

「この世で唯一無二の物だぜみんな！モデルは俺とかどうよ!!」

「なんでもいいわねえ」

「だな」

「んなことよりも遊ぼうぜ！」

といった感じで纏る気が無かったので別の何かを模索中だ。

イリス覚醒まで、あと——

弔達敵連合VSマ！キ！ア！

「異能解放軍？なんの話っすかソレ」

『最近、といっても存在自体はとうの昔からあったわけじゃが……おぬしニユースなどは見てないのか？』

「知らん。んで、どういった話だ？」

『弔達敵連合は少々弱すぎる。先生がいなくなつた今、脳無も数少ない。ハイエンドを解放するときが来たのかも……そこでじゃ、弔が欲しがつとる力、マキアをヤツに譲ろうと思う』

おいおいドクターマジかよ……ただでさえバカみたいに強いマキアを連合に加えるのか。

『じゃが、ここで問題発生じゃ。マキアはオール・フォー・ワンに忠実じゃ。今の弔を見て絶望し、間違つて殺してしまうかもしれぬ』

「そこは俺が全面的にサポートすればいいわけか。なら今から弔達を連れて来る」

『うむ、頼んじゃぞ。一応ヤツはおぬしのことを認めている。信じておるぞ』

ドクターとの通話が切れる。俺はゲートを開き家に帰る。帰ってすぐに弔達を触手

で巻き付けてマキアがいる山奥へと連れて行った。

「おいこれはなんのマネだ!」

「いやだー! ねーてーたーいー!!」

「こんな夜遅くに連れ出すことねえだろ! 今夜中の2時だぞ!」

ガヤガヤ騒ぐ弔達を尻目にマキアを呼び起こす。

「来い、マキア」

すると地面が割れて巨大な腕が現れる。弔達を触手から解放し、マキアの説明をした。

「コイツがギガントマキア。前に一度説明しただろ?」

「お前…扱えないって言ってただろ」

「ああ、マジで扱えないぞ…普通なら…な」

そう言っつてマキアから離れる。するとマキアが起き上がり弔を見た。その目は何処か絶望し、残念がっていた。

「だからお前からでコイツを倒せ。というか力で捻じ伏せる。オール・フォー・ワンの忠実な下僕にして、改造されていない列記とした人間だ」

「…は? (え?)」

うん、わからない。複数個性持つてて改造脳無じゃないって言われても信じないよな。

俺も信じなかったもん最初は。

そんな事を思っているとマスキュラーが最初に仕掛けた。何層にも厚く増やした筋肉でマキアの顔を狙って殴る。だがマキアには何一つとして聞いていなかった。それだけではなく、マキアも同様に筋肉の層を張り、マスキュラーを殴り飛ばす。

「これは…マスキュラーの?!」

「イリスお前!!」

「いや…その…わ、悪い!」

「「おおい!!!」」

今のマキアはそうだな…以前のマキア十体分の力がある…かな、ははは…十体以上かも…

マキアは一度筋肉の層を外し、何故かまた筋肉の層を張った。

「……………あ、お前ら逃げろ!!」

「あ?何がどう——」

マキアが振りかぶった両腕から蒼い炎が巻き上がり、弔達を包み込む。

流石にコレはヤバイ!!

俺はゲートを開き、弔達を回収する。回収してすぐに弔に胸倉を掴まれた。

「おま、お前…馬鹿じゃねえの?!」

「悪かった悪かった、悪かったって。取り敢えずマキアは俺が落ち着かせる。今は休め
「いや俺は休まない」弔? さっき頭ぶつけちゃったか?」

そう言うのと殴られた。なんで?

「アイツを力で捻じ伏せれば言い訳だ。なら簡単だ」

するとトウワイズが突然ゲツプをした。それにトガが若干引いているとトガの口か
ら泥が溢れ出てくる。

ああ、ドクターか…

弔達が連れて行かれ、俺とイフとギドラは残った。

「んじや、ここでのんびりキャンプでもしますか」

「さんせー! マシユマロ焼いていい?!」

「たべたーい! 早く焼こうよ!」

「気が早いぞ二人とも、焚き火の準備すらしてないんだぞ?」

その日のうちに弔達は帰ってきてマキアと再戦し、ボロボロに負けた。圧倒的だっ
た。

「ヤツは…アイツはなんなんだ?」

「ギドラ相手にタイマン張れた男」

「そりゃ無理なわけだ」

「ほら安地で休みな戦闘中だつぞ！」

「うお、おおああああ?!」

「まあ、みんないいヤツら…だったよ…」

「「勝手に殺すな!!」」

振り返るとマキアが寝ていた。疲れ果てた弔達が安地ごとキャンプ地で休息を取っていた。

「まあ、お疲れさん」

イリス覚醒まで…あと数ヶ月――

すまん、もう一回言ってくれ

あれからいくつもの作戦を練り、毎度の事弔がふつ飛ばされるのを見ていた俺、イフ、ギドラ、トウワイズ、トガのところに電話がかかってきた。

「もしもし？今取り込み中なんですけど？」

『わたしは「あ、売る物はないんで電話切りますね〜」待て！お前達この電話番号は義ら

—— ツーツー 』

「なんの電話？」

「わからん。取り敢えず弔を回収して飯だ飯。マキアは眠らせておく」

「わかった！ギドラ、おてて洗おうね」

マキアを専用の麻酔で眠らせ、弔を回収してバーベキューをする。まあ案の定焼いている肉で揉め事が起きた。

「それわたしが取っておいた豚肉です！」

「残念トガちゃん、これは豚バラだ」

「かーえーしーてくださいーさーい！」

「あ、これ辛口じゃん。イリス、甘くない？」

「ソフトクリームでもぶち込んで」

「甘々になるじゃん！」

するとまた電話がなってきた。今度はトウワイスの携帯だ。

「ん？おお、これ義爛からだ！もしもし義爛！久しぶりだな！元気にやってるか？今バーベキューやってただけだよ！一緒に食べないか!？」

『ヴィラン名トウワイス。個性2倍…』

「あ……？……誰だお前」

トウワイスの電話から聞こえた音声は機械音声のような感じだった。その声には俺達は警戒する。

『わたしはデステロ……だけでわからないかな？』

「……大昔にいた伝説級のヴィランじゃねえか。そいつが俺達になにようだ？」

『簡単なことさ。君達が邪魔なんだよ。我々の計画にね』

「邪魔？」

『ああ、だからここで「おい待てよ！」どうかしたのかな』

トウワイスは声を荒げて顔も見えない相手に叫ぶ。

「義爛、義爛はどうした！アイツはチャラけているが根はいい奴なんだ！口も硬いし信頼できる情報屋なんだ！」

『義爛：ああ彼は近くにいますよ。そうだねえトウワイズ、君は彼を良く信頼しているよ。うだ。だが彼から話してくれたよ。ヴィラン連合のことをね』

「そんなわけねえ！アイツはそんな簡単に情報を漏らしたりしねえ!!」

「おいデストロとやら、お前今どこにいる」

弔がトウワイズから携帯を取り、崩壊しないようにと中指だけ立たせて携帯を耳に当ててる。

『ふうん？教えてどうするのか？』

「お前を壊して義爛を助ける。ただそれだけだ」

『仲間でもないのにかい？』

「仲間じゃない？ふつ、大事な情報屋を見捨ててたまるか。義爛は俺達の仲間だ」

『信頼されているようだな。義爛よ』

そこで通話が終わり、そのデストロとやらから場所が書かれたメッセージが送られてくる。

「……か……」

個性を使用して地図を暗記する。

「マキアはいつ目を覚ます?」

「3時間後ぐらいだろう」

「なら急いで飯を食うぞ。義爛を、仲間を助けるために」

「だがリーダーよ、相手が何人いるかわからねえぞ」

「わからねえならそれだけだ。コイツは……トウワイス悪いんだがその携帯破壊しろ」

「はあ?!なんでさ!オツケー任せろ!」

「何を仕込まれているかわからん。もし盗聴アプリとか入れられてたら終わりだからな」

そういう渋々携帯を破壊するトウワイス。これが終わったら新しいのを買ってやる。

「んで話の続きだがマキアは俺の匂いを追ってくる。ならコイツが目覚めたとき、俺達がデストロと戦っていたらどうなる?個性の制限を物ともしない正真正銘の化け物だ。デストロがどれだけ強い個性があるうともマキアには勝てないだろう」

「そうだな……ちなみにマキアに個性をコピーする個性はつけてないから安心しろ」

「つけてたらお前を殴ってるぞイリス」

「えっ!」

全員の目線が俺に集まる。

「あ、でもアレはつけたわ」

「アレ?」

「おう、プツシーキャッツ?って奴らの軟体だっけな」

「巫山戯るなよお前マジで」

「難易度バク上がりじゃないですか」

「積みゲー消化しにいったいいい？」

うぐっ…すまない、徹夜で遊んでたから…

「おいそんなことよりも義爛だ！義爛を助けに行くぞ！！大事な仲間だろ！！」

「そうだな…よし、行くか！！」

ゲストロから送られた地図に書かれた場所へと向かう。ちなみに地理に不得意な俺は五回迷ってみんなを怒らせた。

「すまん、もう一回言ってくれ」

「だーかーら！イリスの個性に厄介なものがあつたんだって！ほらヴィラン連合を襲撃したバー、あそこに個性に関する資料が置いてあつたんだ。そしてその中に書かれていた厄介な個性、その名も《リフレクター》と《剛翼》!!」